858
6
取扱注意 鉄入

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

ガラス使用

858-6

序

夫(それ)人(ひと)は天地(てんち)の霊(れい)にして五常(ごじょう)を具(ぐ)し礼儀(れいぎ)を以(もっ)て尊(とうと)しとする所(ところ)なり又(また)茶(ちゃ)のおこりは唐(とう)の代(よ)より起(おこ)りて日本(にほん)へ伝(つた)はり其(その)後(ご)利休(りきう)の時(とき)に至(いた)りて大(おほ)いに流行(りうかう)し諸人(しょにん)茶(ちゃ)を楽(たのし)むこと甚(はなは)だ多(おほ)し然(しか)るに利休(りきう)の茶(ちゃ)を改(あらた)めて遠州(えんしう)の茶(ちゃ)を行(おこな)ひ又(また)遠州(えんしう)の茶(ちゃ)を改(あらた)めて石州(せきしう)の茶(ちゃ)を行(おこな)ひ其(その)後(ご)石州(せきしう)の茶(ちゃ)を改(あらた)めて宗旦(そうたん)の茶(ちゃ)を行(おこな)ひ宗旦(そうたん)の茶(ちゃ)を改(あらた)めて不審庵(ふしんあん)の茶(ちゃ)を行(おこな)ひ不審庵(ふしんあん)の茶(ちゃ)を改(あらた)めて織部(おりべ)の茶(ちゃ)を行(おこな)ひ織部(おりべ)の茶(ちゃ)を改(あらた)めて小堀遠州(こぼりえんしう)の茶(ちゃ)を行(おこな)ひ遠州(えんしう)の茶(ちゃ)を改(あらた)めて石州(せきしう)の茶(ちゃ)を行(おこな)ひ

洛陽鮒菴主人 井上玄茶全新著選

当世茶之湯独槽一

立テ撰 吾ん

立テ撰之まきを編

同事ハ何ニても人を茶湯よりてまよくれ
客ニ方ニ前ニ切ニ亦ニ来ニ茶ニ無事ニ合ニ同何日
よりも尤ニ門茶ニ事ニ此ニ物ニ来ニ上ニ相ニ紹ニ鷗ニ
又多ニ名ニ物ニ多ニ名ニ人ニ

文章

来ル何日ニ此ニ茶一刻
ニ名ニ物ニ多ニ名ニ人ニ

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独槽』　請求記号 858-6

ガラス使用

客の方へ出すよし仲蕃これに答礼をとりもし又客のまかり出ても礼状をおくる人数も客より亭をへらさるもの也（ママ）（ママ）

又亭より主へ湯をもらひにやれば遣すもあり

一客茶に湯を入るに先つ主より客へ見せ改十徳上下衣乱箱の類を湯の沸候中よりあつらへ手拭帛香炉し用ゆるなど

皆さらに用ゐず客の好物をもあつらへ食事を与へ終日逗留させ送り出す時に及ひ

一客おのおの結伴して主の方へ行き礼をのべ

主亭にて酒肴を出し饗応する

客入て釜の下火を焚ける時分を見合て主より客の方へ

案内状をおくる

客より其日の内に

案内状あらハ

客より其ことはりの人数を書

すると共に

案内状を入来ると

内状共に石灰にて

雪隠を見る高麗茶碗あるをもちゐるもよし流しをもちゐるもよし
ふるかね掛花行灯かけ物先ッ釣釜
けごみの水こぼれ立掛て壁次に風炉下座
あとより出る
床のかけ物をよして大目に入棚荘釜敷也是座
に着次と同し座を出勝手より出入ざつとを
亭主挨拶口より客とメお詰
をもくれをよしもよし右まづかやうとも云て挨拶

入る茶壺口かこみ共敷物小紫色々を出迎
お初め口まで見れば手に汲置水屋
戸出メ羽箒炉の右より釜
釜敷を出す釜敷ハ釜
釜あけお挨拶の通へ
着座炭手也是ほうろく
居也炭斗羽箒炉縁
所也もくも白炭を添
墨筆もとびくも硯蓋へ
多葉お通し香合へ出
客香合ゟへ出スゟ白紙
くあゟへ方へやる羽箒

下は風雪が客合の客と口ん釜と同矣
器を洗ふ矣亭主居向鼎ハ
んと口ん蓋メ炭ハ入挿ハ口ハ内ハ品
物も釜ハ蓋ハ水指蓋メ釜ハ
ふさ片口ハ漆掬ハ口ハ
釜にて引茶如ハ品炉へ
ふ口挿ハ羽箒ハ
掃ハ口ハ挿ハ
ふ口挿ハ
ふ口挿ハ
ふ口

ちも紀のも大抵茶巾を置くて茶
茶入ぬく時蓋とみて蓋こ内をこんちう型有
もの品ゟ有 茶杓(巾)茶巾ゟ品ゟ有 茶巾ゟ品ゟ
茶筅ゟ品茶入の掛ゟ蓋ゟ兄ゟ物数ゟ品
の上ゟ蓋茶碗ゟ品ゟ兄ゟ物数ゟ品の
たゟおゟし帛出ー釜こ蓋ゟゟ品茶筅ゟ品
碗へ入ゟ品蓋メ物数ゟ蓋ゟゟ品茶巾ゟ品ゟ
茶碗へ入湯ゟ三ツメ引上ゟ兄ゟ品の元へゟり茶
きこちりゟ品さゞ包湯拾ゟ品茶巾こぬく
ひ内ゟ入茶碗たくゟ品ゟ下ゟ蓋茶巾ゟ
元へゟちゟお茶数ゟ蓋ゟ品茶入ゟ兄ゟ品の
茶入元へゟり茶杓ゟし茶入ゟ兄ゟ品の元へゟり茶

物数ゟ品の蓋ゟ包おゟし帛釜こ蓋
物数ゟ品物数ゟ品蓋物数ゟ品茶碗へぬくゟ品
入てゟ品茶巾ゟ品茶出スこ客ハを内おゟ時宜有て又
茶碗ゟ品出スこ客ハを内おゟ時宜有て又
亭主ハまいりてもとゟ時皆洲ふくさゟ包
蓋たこの包茶碗帛の上へのせゟ品ゟ品の
おいてさ三ツ三口をのこ次こ向こ下座茶
筅上座へ戻ス上座ゟ品の兄ゟ茶碗ゟ品兄
元へ除こ兄ゟ也 亭主ハい茶點出ー客の
口のゟりとつて茶筌のゟ品ゟ兄ゟ物数ゟ釣棚へ
あけ中仕舞をゟる こ湯茶碗も物ゟんと品
前ゟ物のゟこ物数ゟ品蓋ゟ向のゟこ夜ゟ

入まゐ茶筅帛容ら物ら帛夏茶筅夏
いまを支下小重和と寿ふ一ぎよ礼お礼ト
ひさの時宣云て物お夜湯入ふ今ちゆい入ら
茶呑備をおふいぐ来ふ茶の心也湯すを
探てふ入て茶筅ま青元へ申ふ多ふ茶市
ますま露を甲ひ内へ入と乞茶筅雅の事
帛ら如く時客ら茶入を支ふ蓋をメ筒と
茶入お高茶へ客帛ら口をふ茶お落もまへ食おス也
まふふ扱易まそ七ス茶お夜、釜よふさ一物
みも扱易まそ七ス物お夜、釜よふさ一物
お夜ま支ふお支ふ蓋志メ物お行ふ験にケ水指の
蓋志メ物お行ふ験にケ水指の一面鏡よ入ふお指ま入

取け時お高筒をぐふへてふ指居ふと皆味す
お高の茶入袋茶お物ふ指るを面ふよ指指ふ
と礼有立炭不也ふ支ふ指ふ
茶よ同中男ふまふとしんふ客ふら各
也云を次の男へ面ス申衆也の風ふよ書
院へ面し当乞礼ふ支ふ有ふ申ふ死のまま裏有
亭主ふ一口ふおふふの一礼ふ来ニ云明る客
今也不ふ礼ふ申ふ亭ふ
ふ合スすふ
け面ふ和ん志ふよ

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用

手之圖目錄

○炭取之事
○羽箒之事
○灰を耙ル事
○炭を次ク次第之事
○火箸之事
○釜かけ之事
○柄杓引切之事
○香合拂ひ之事
○蓋置ゟ柄杓之事
○茶碗前口之事
○茶入前口之事
○茶入袋ゟ出ス事
○茶杓之事
○茶巾之事
○茶筅之事
○柄杓ゟ柄杓之事
○茶碗前口之事
○柄杓之事

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

ガラス使用

○ 掬水用柄杓事
○ 茶碗ぬくめ事
○ 茶筅通し事
○ 茶巾しぼり紙事
　付帛紗さばき事
○ 茶入れ事
○ 茶杓先ず茶を盛る事
○ 茶入おろす事
○ 茶杓出す事
○ 茶碗引く事
○ 茶入引く事
○ 茶碗拭き蓋する事

○ 茶碗茶のいきを受ける事
○ 茶碗引く右左の事
○ 茶入袋を戻す事

茶し湯ふさぎ引

茶通居ふさぎ

○ 如何なる客ぞ。物相を茶室の内にて
○ つもるゆうべ
○ ひらき戸ぞ
○ 風そよぐ

炭
右
扣手

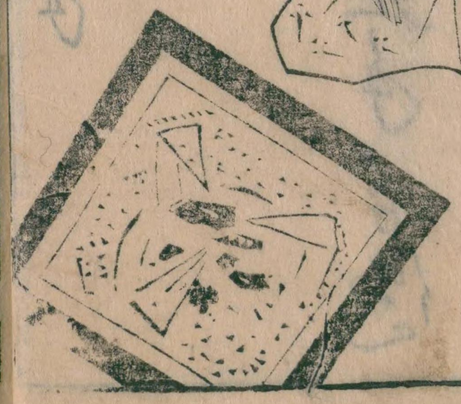
左

右

羽箒扣手　九ノ右

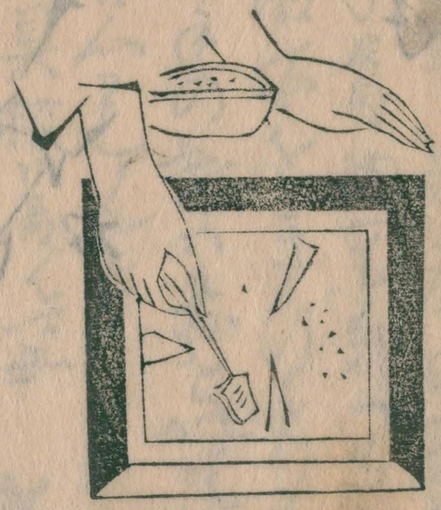
○茶立ル内扇ノ大ひ
○手前内ニテ外ヘモ折
○居ヲヲキヲソレヲ
○左ノ手ヲ扣テ
○居ル也ソレ
○通具扱ヒ畢ル一ツ

上



国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用

右



炉へ灰を
敷く手

七

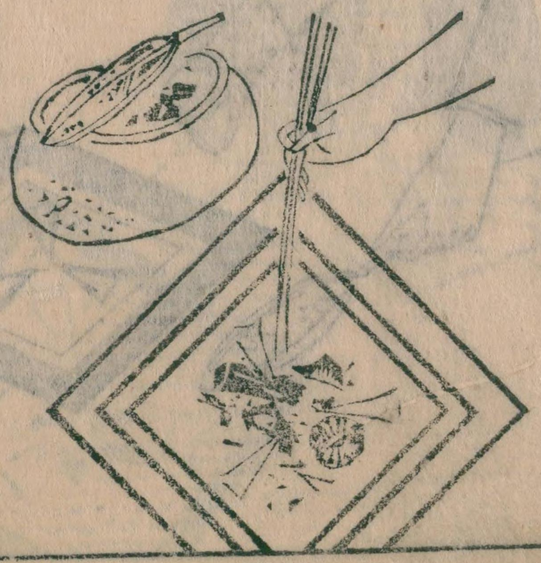
右

釜台を指

九

釜かけをうし
なう手の

右



石

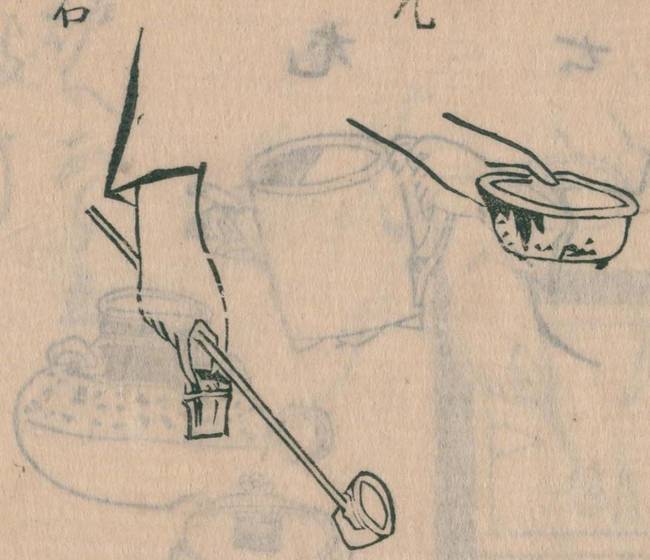
九

炉へ炭を次ぐ

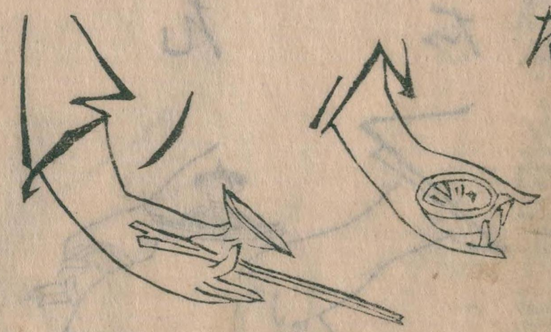
国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用

柄杓取扱ひ
手右

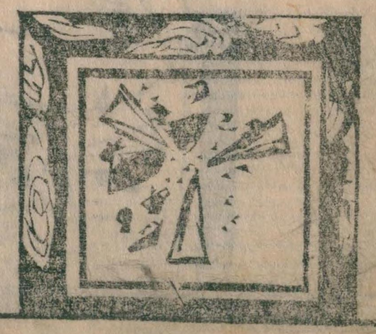
蓋を取扱ひ
手



柄杓之扱ひ
手前ニ
湖也



釜あげ炭扱ひ
香合ノ



国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用

茶入おろし方

右

左

茶碗おろし方

水指
おろし方

右

左

茶入はこび

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

ガラス使用

中ん茶入
ようす

右 左

右

茶杓

茶筅 右 左

柄杓 右 よわ

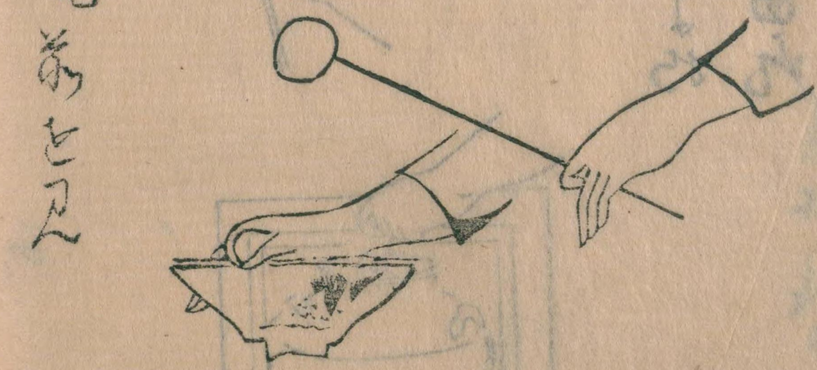
右 帛紗 蓋 左

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

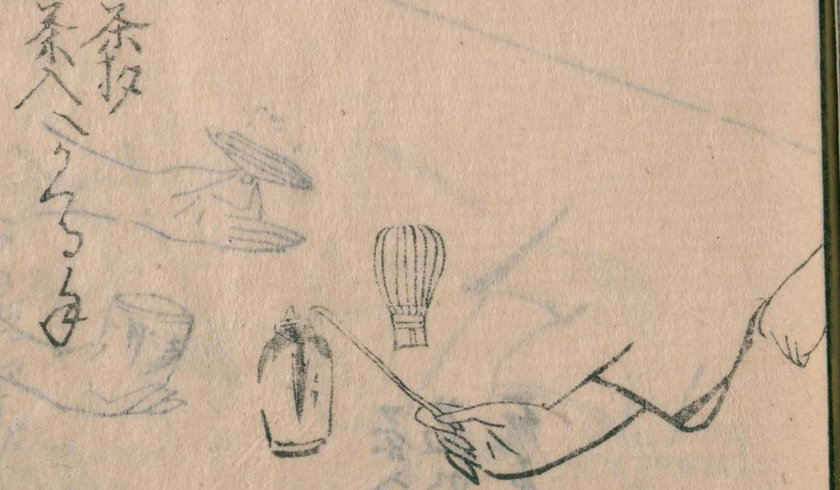
ガラス使用

風炉和敬
右
左

中くち茶入もたのもの



茶碗茶とる

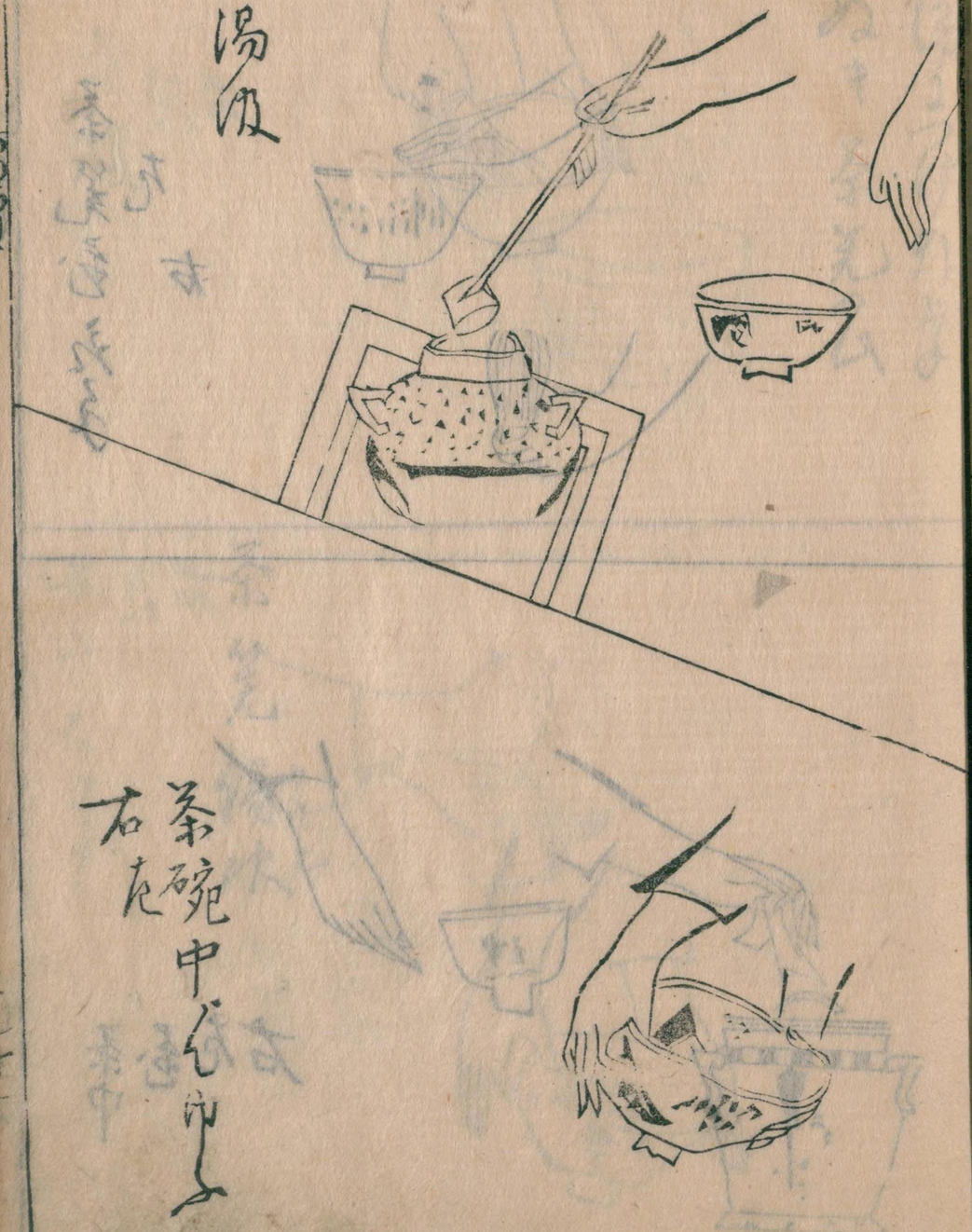


茶杓
茶入ころも

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

ガラス使用

湯汲



茶碗中ゑ
右左

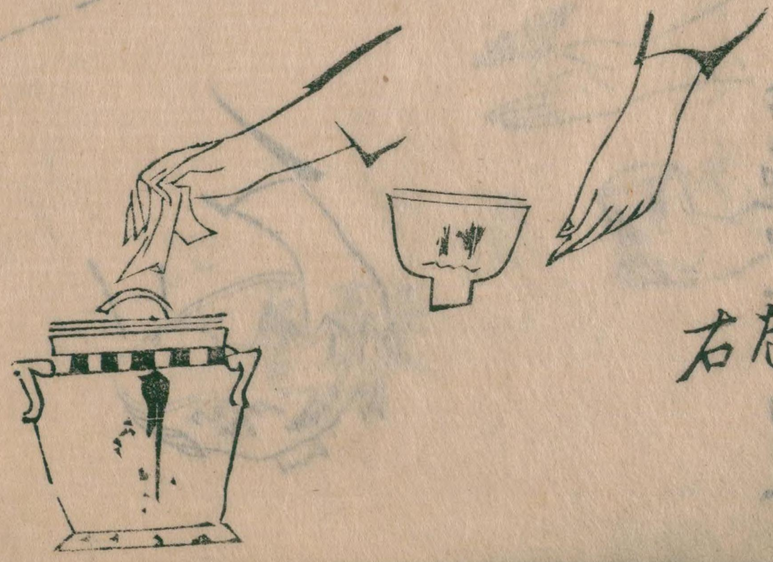
茶を入れ
右左

茶入蓋
右左

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

ガラス使用

茶筅壱ツ
右



右茶巾

ほうつけ引ふ
ぬき茶筅名

茶
筅
湯次
名ニ

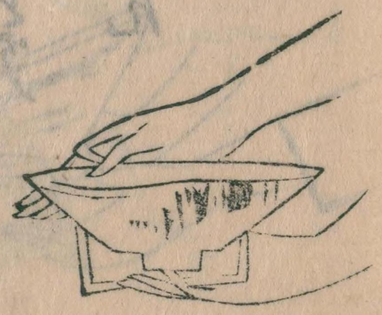
国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

ガラス使用

茶點
九
右

九
右
茶筅通ス

茶巾さばき
九
右



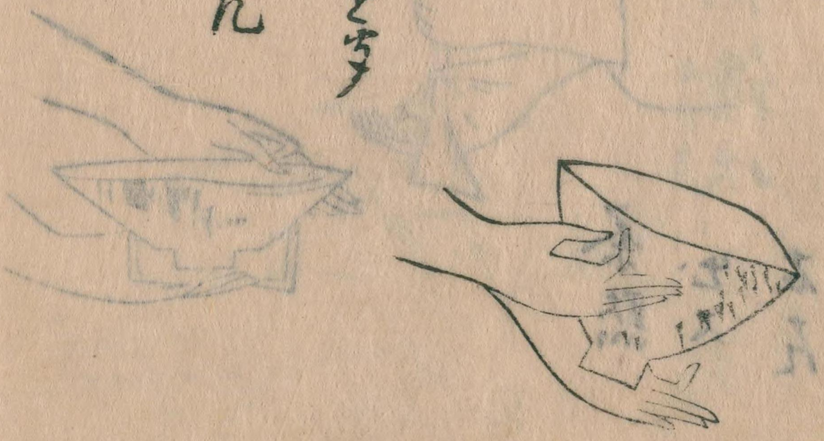
茶點
出ス
右九

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

ガラス使用

茶のむる
右九

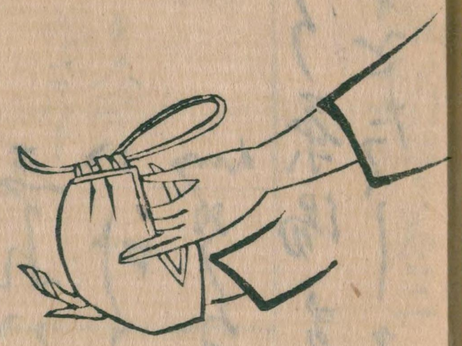
香をきく
右九



茶筅こ
右九

同
右九

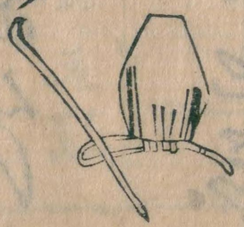
国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用



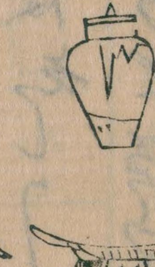
袋足揃
左右
指と入レ又モ
ニ本揃有

茶杓
袋

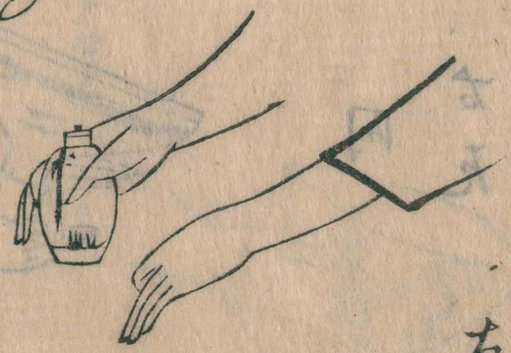
茶杓
袋



茶杓
袋



茶杓
袋

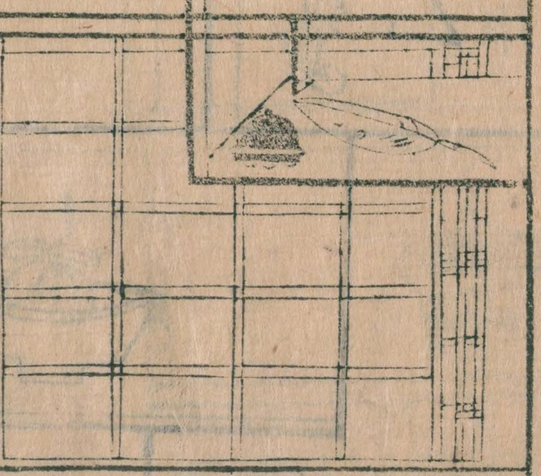


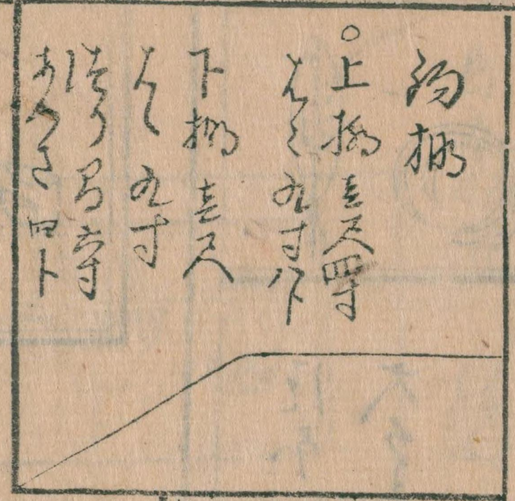
茶入底ス
左右

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用

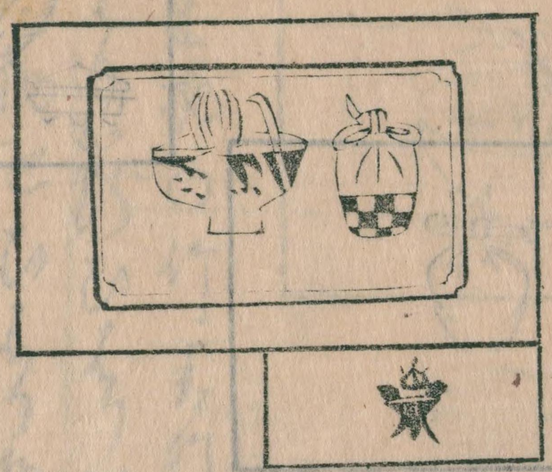
手ごま圖大略
仕込茶ごま湯ゟ大事の
席をもまれど
席ゟおもてへ出ざる
有
これハあるもの
ハ叶ざるもあるもの仰
仰やうと云ども
みそう茶湯まぢめを焼て
流茶をたてゝ手ぬ

○地炉長六尺。地炉ゟ二尺寸



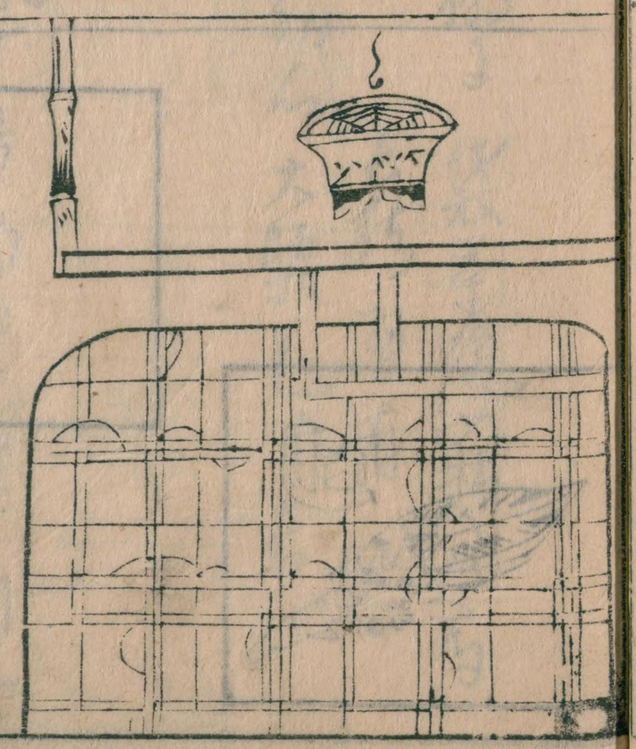


国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独槽』　請求記号 858-6
ガラス使用

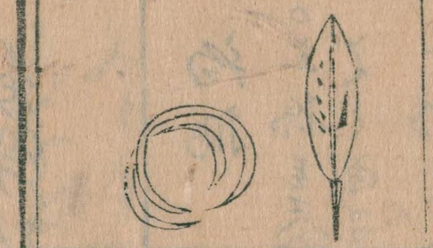


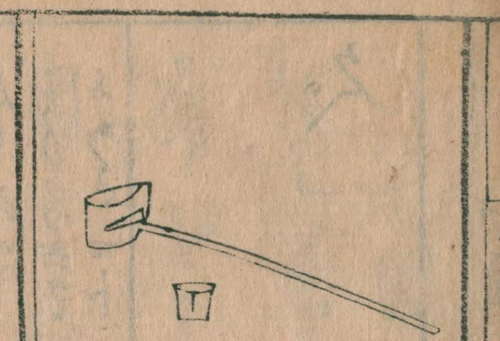
上掛よ
色色莊

下掛よ
ほゝ莊

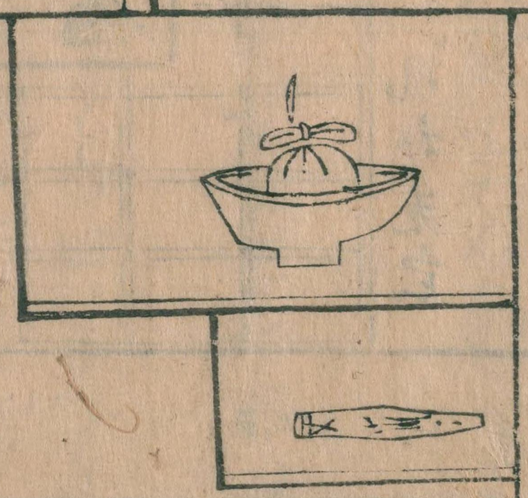


上よ
香爐





下掛よ

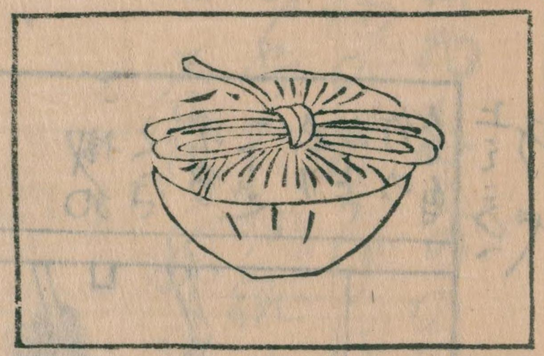


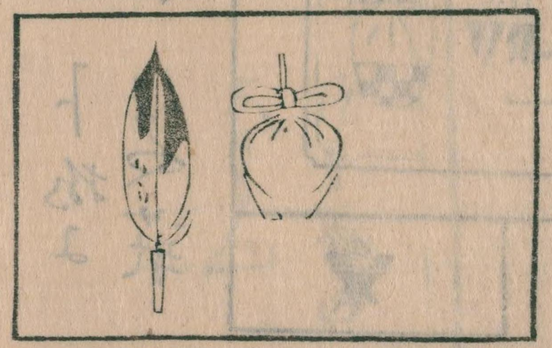
上掛よ 墨蹟よ 茶会入莊

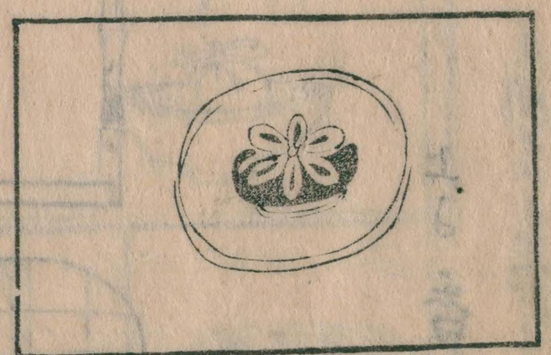
下掛よ 簡人ゟ 茶ノ湯 莊

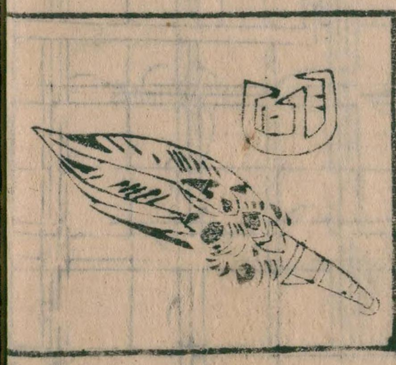
国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

ガラス使用





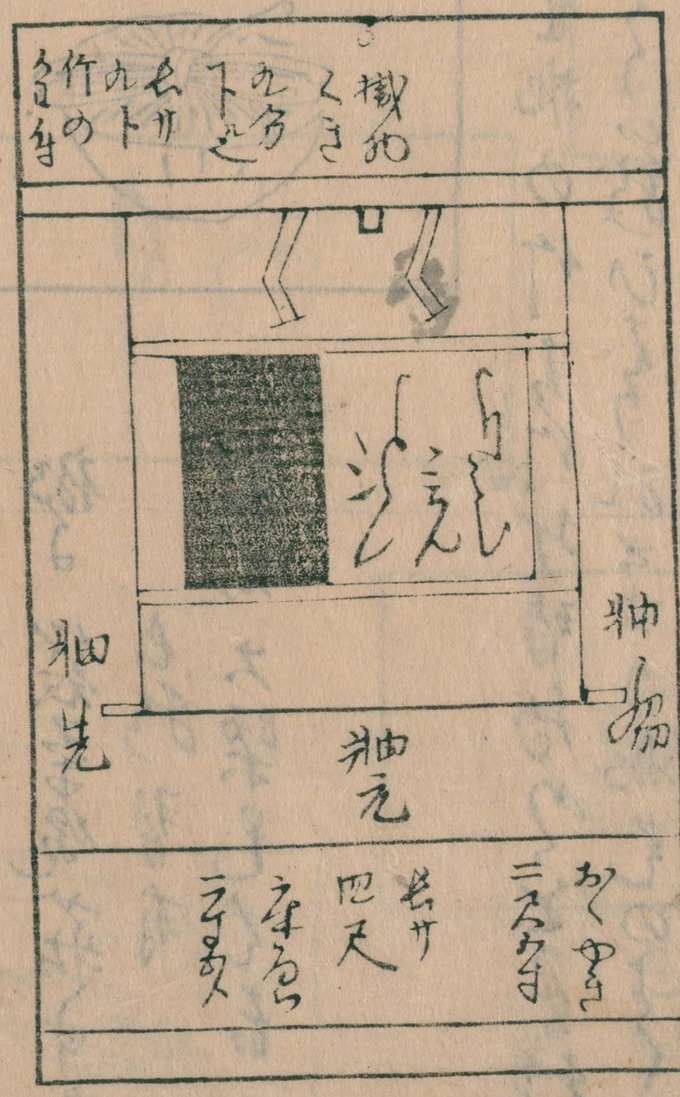




二重物の竹書行
ひそう影ひぐみ
ら物をひそう物

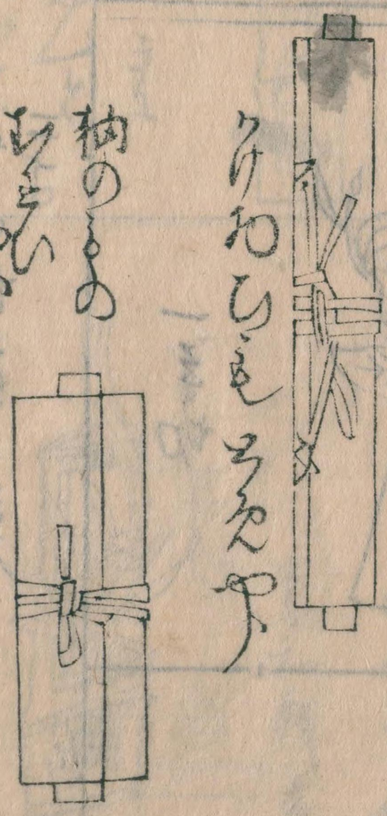
一
初
大

物
袋茶碗荘り
も物有
堅毛く



定杓ハ竹のふしとこ

○掛物幅等の物ハ墨の方ニ置絵の乱ケたる方ニ右仰出而掛候ハ軸先のほうへ向ふ也但巻物等の物ハ引廻ス事ニ候



天入切

あふこと切

家木移之

竹之花生 花なけれ共 すきものと云ハ 亭主の心入をもつてもつともつとも

一重切

天井の中釘

掛の内よりさくる

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

ガラス使用

びの
うるほとぬをく
ニーうるもの

花の入物
のやうなもの

竹花入
底の中高の
ふくらよ
うなもの

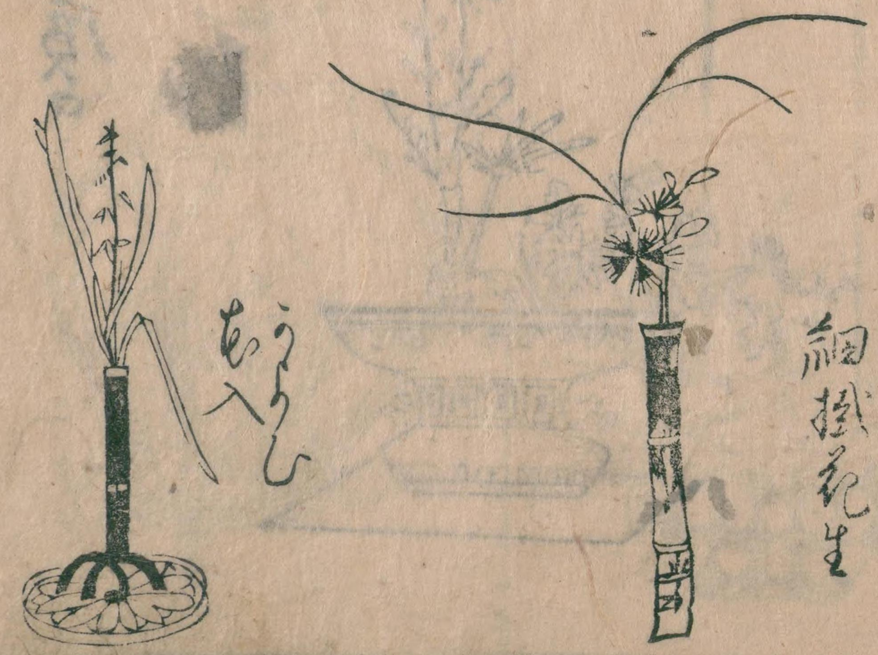
二重切下より
もを入れ
あり

名ばを入

竹花
一文字
の二重切

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

ガラス使用

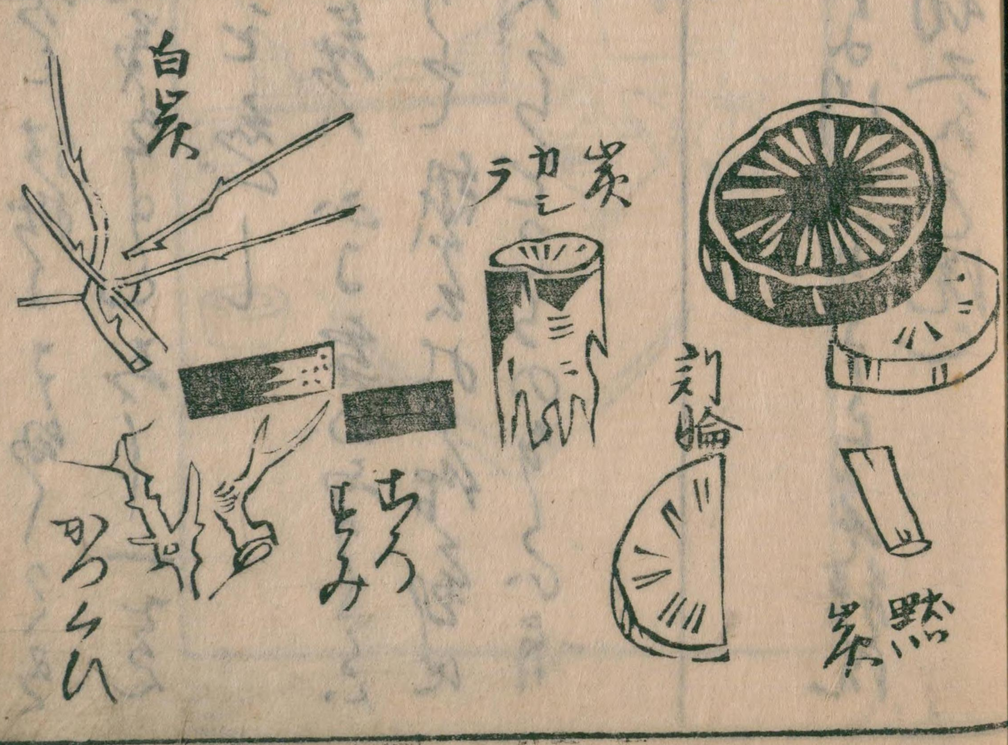


国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

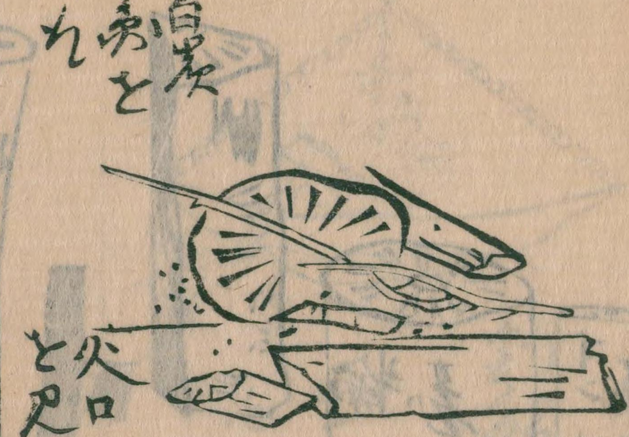
ガラス使用

釣瓶の花よろ
生瓶
と名付

如茶陽方生花ハ
立花のごとく生ケらし



国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用

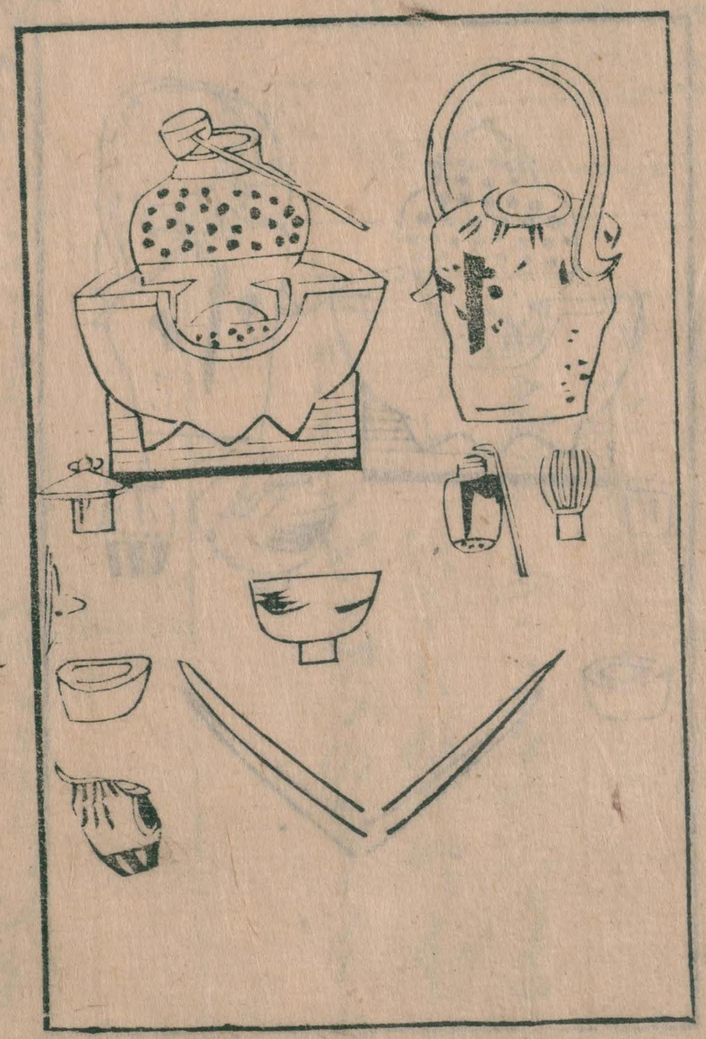


炭ハ白炭ヲ仕舞ヲ多クスルヲ流義ノ本意トス一ツ
又火ヲ細ヤシ白炭ヲ二ツ三ツ
ヲ入ル事ノ有
ソレヲ細ヤシ又ソレヲ細ヤシ
ヲ入ル事ノ有

切炭ハ切ラシテヨリ
為ニモ
ジスレハ合引切ヲ
ヲ入ル事ノ有

風炉花月

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用

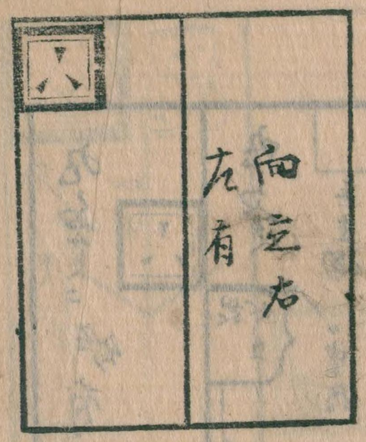


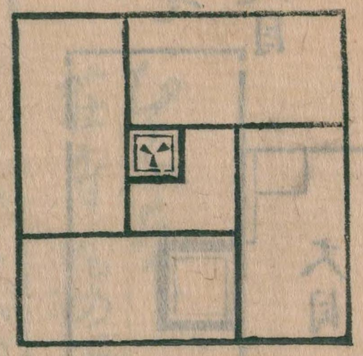
一風ありて三ツの玉ありと云ふ
みつの玉よく仕舞方二つ物ありのごとく實を
一少枝先枝八角等枝ありて實ありのごとく
ありを限と云ふ
むくの木枝大枝等代少ありて大葉右

弐四 數寄屋の口器

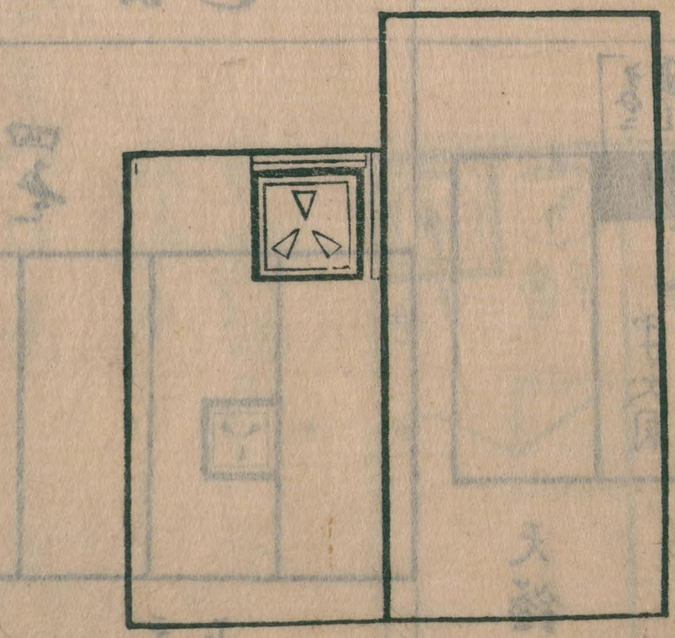
玄やきものの火炉口ゟ脇を出スさらす
脇出スロの様ゟを上座ゟ居ゟを上座と云

第三ノ炉小ゟ居ゟ上座と云ス中ゟ炉
居ゟゟと云ゟ是也四畳半同年
主客共ゟ居ゟゟに居ゟゟ
客人の功名不問てゟし
易ゟゟゟ亦ゟ様ゟゟと云ゟ



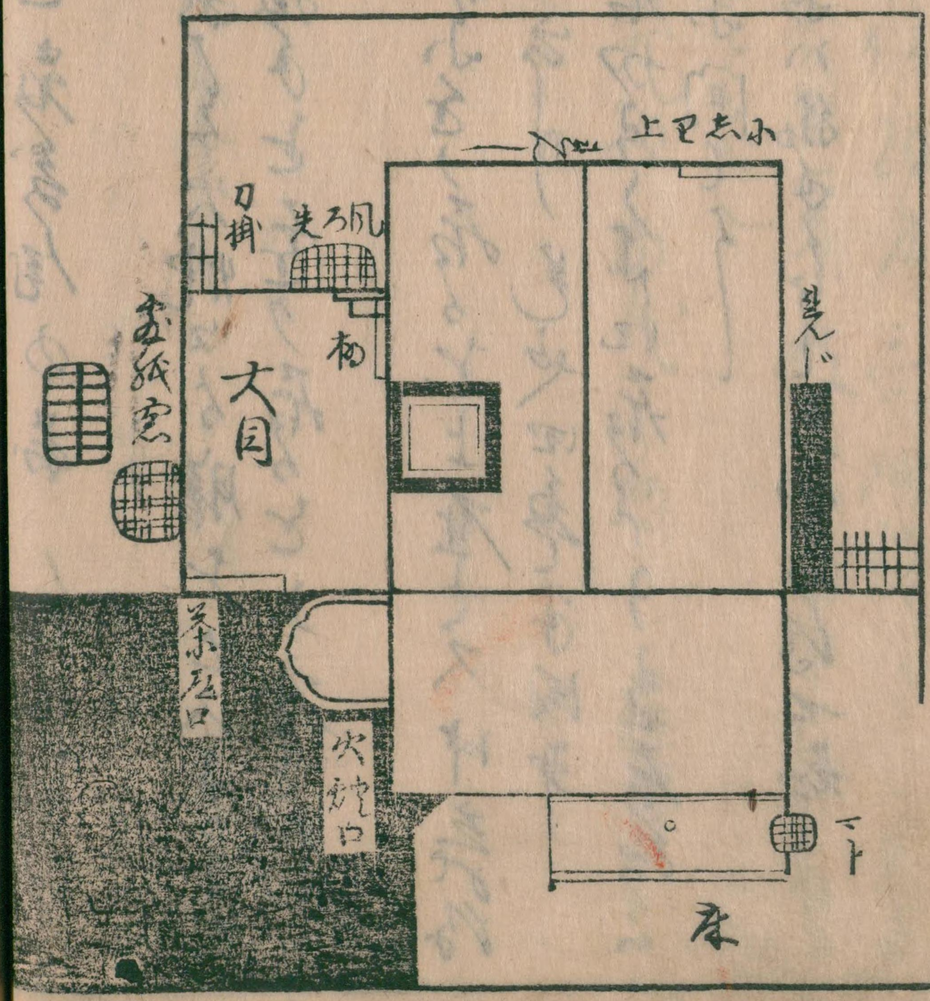


四畳半



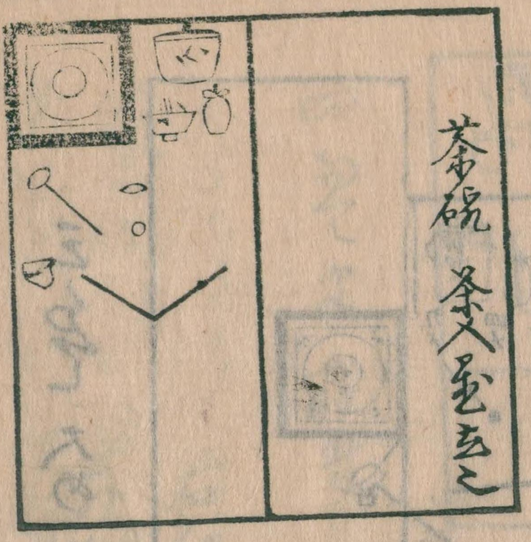
去畳半大圓炉の入損右左あり

雲龍

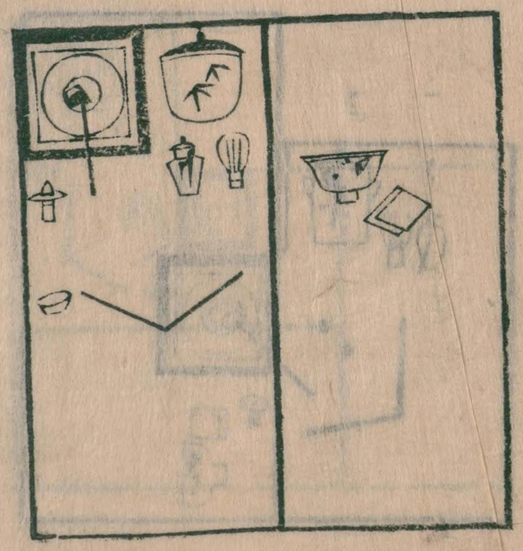


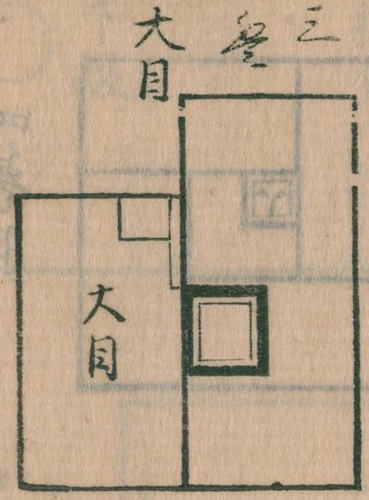
国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

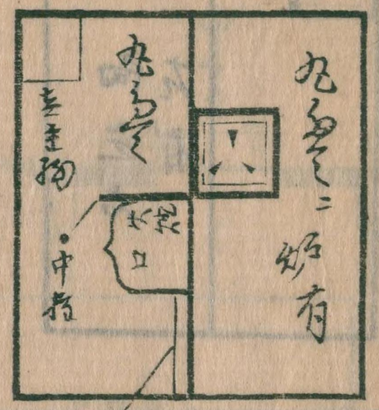
ガラス使用

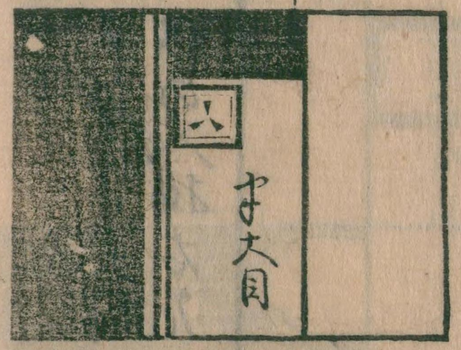


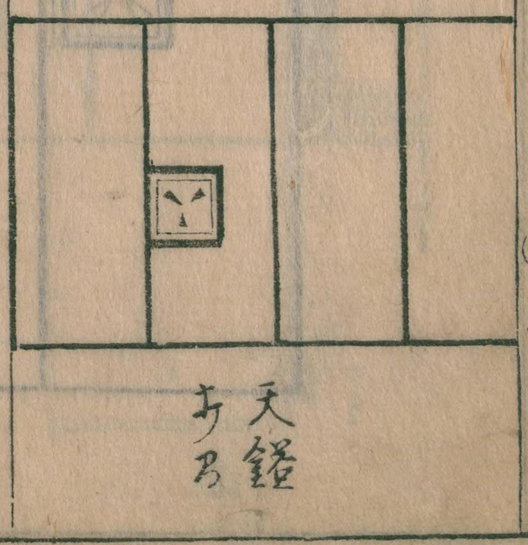
茶碗 茶入 茶巾





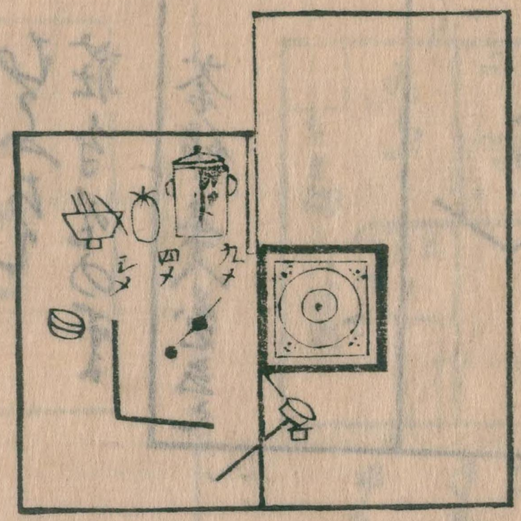






国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

ガラス使用

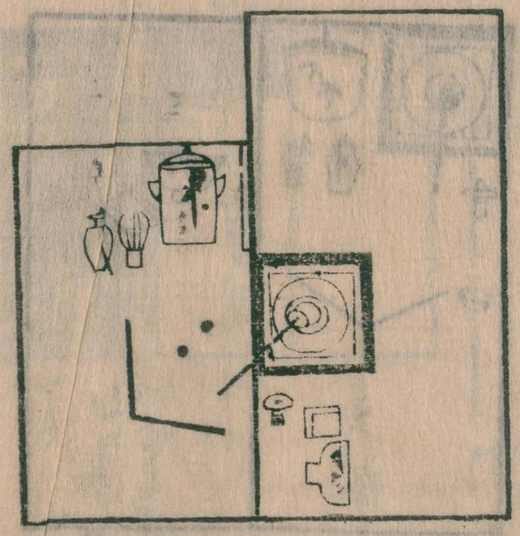


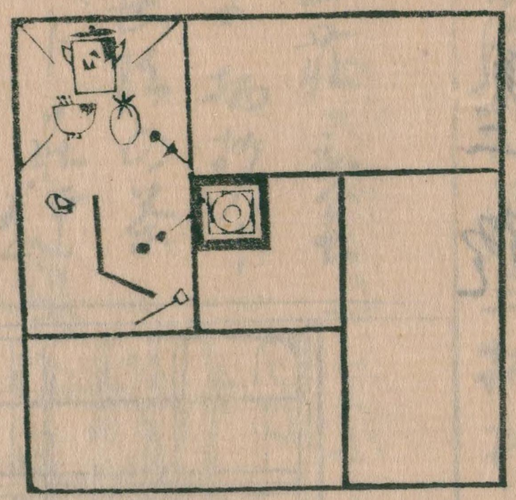
三尺大め

第三板好品

右縁ヶ

左縁ヶ有

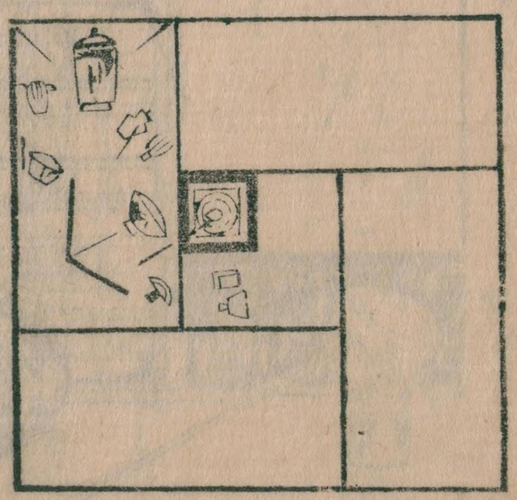




四尺半荘

右縁ヶ

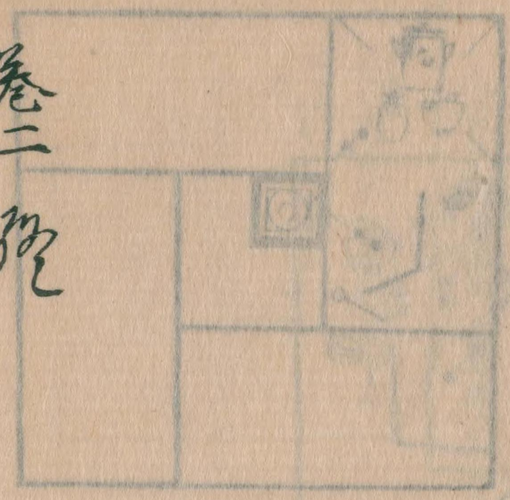
左縁ヶ有

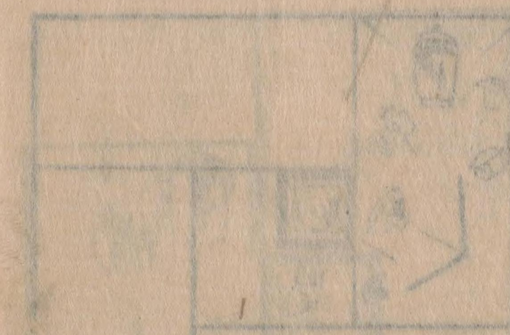


立縁品

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

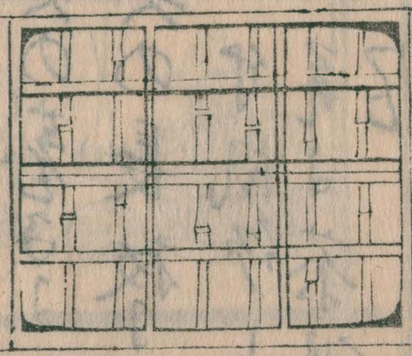
ガラス使用

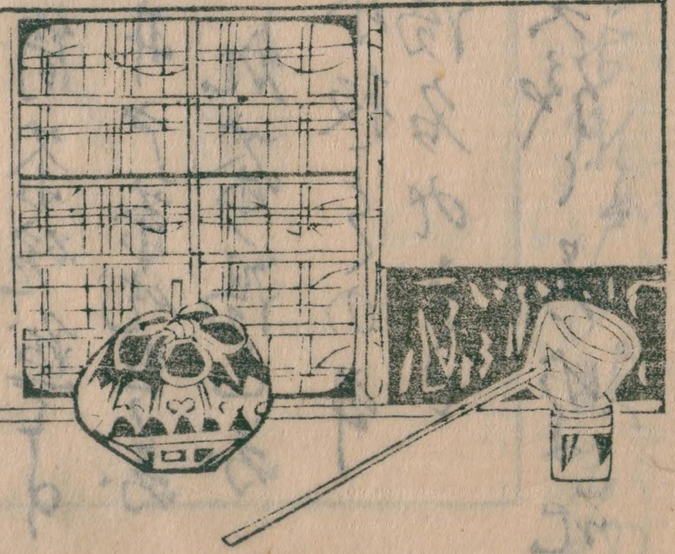




巻二終

炉のかこひ切ものも大概名
あしかの事ともまとめてのら
しるし



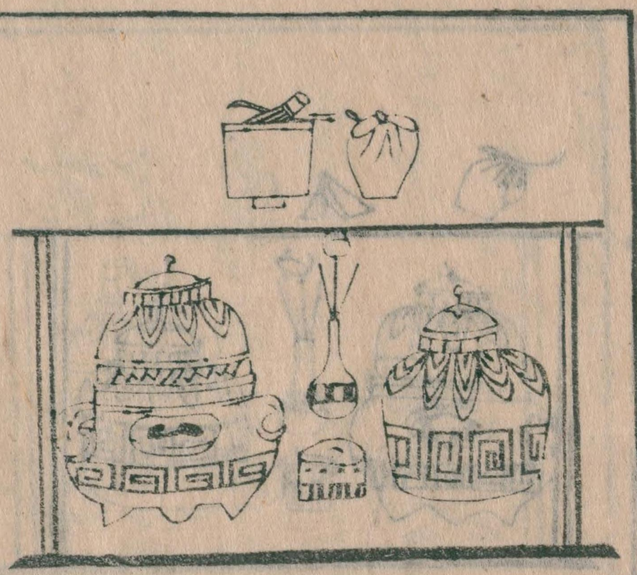


山荘 夜会
よ地抔ト
長殊の茶
入ト荘申
之

事多き

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用

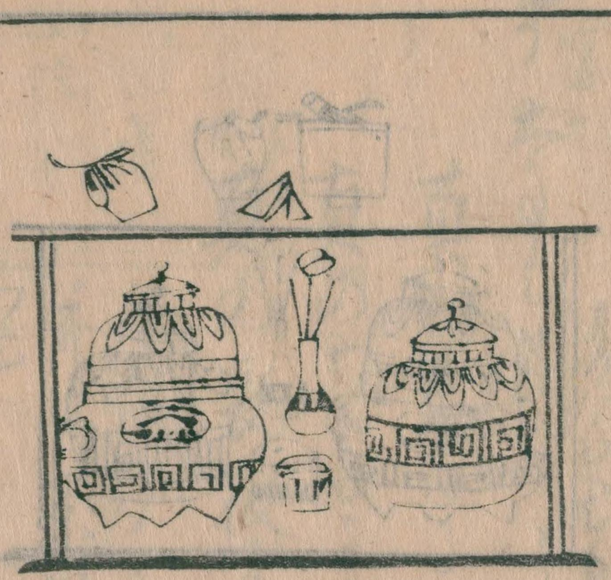
真之茶子
葉よりも大
物事よろし荘あり
真の葉よりも筒茶碗熱湯
真の茶子井戸茶碗立ノ事
真の長枝子丸茶ノ湯之事
仕風炉小枝その年
葉よ茶ノ湯名ありと
已
於真之茶子奥伝ノ事

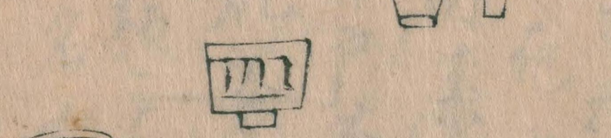


真の茶よ露地茶人
一露首茶人庵物場
為事抵当ある事有
之

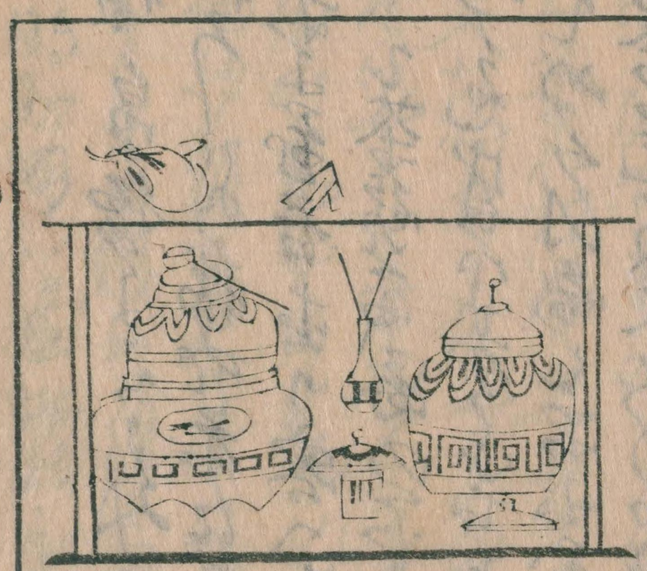
露地茶人筒茶立
事物古風ノ類名也

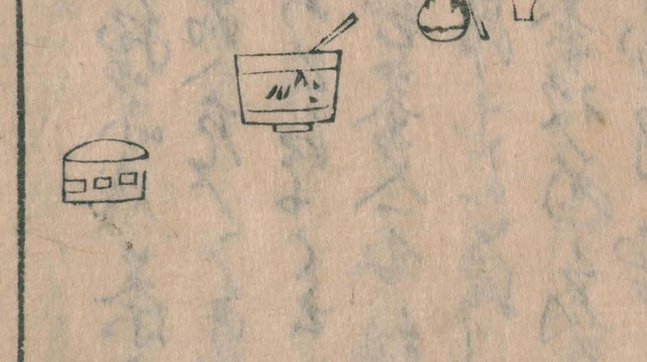
国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用





一筒釜究ん乞縁手
少頸肉そ弟用弟如
釜帥蜂釜弟示すも鋳





客ろ度よ羽そつみ
茶方字湖お心写真の
入右く釜窯も抑先中

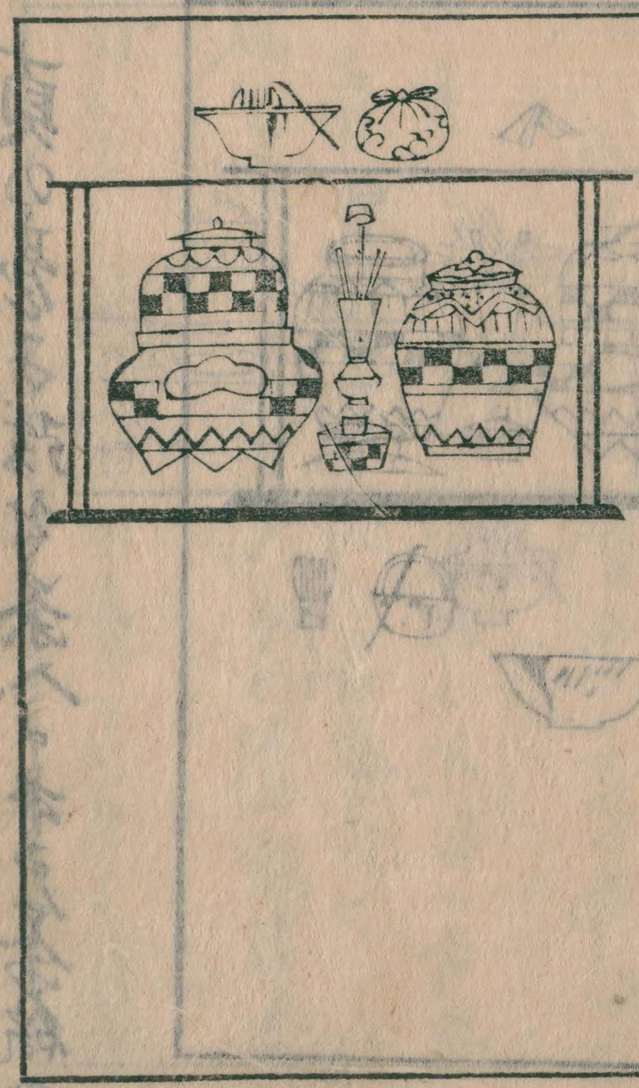
一真多風炉ま七尖口の廣さよろと松器

ゑ双へ出ゑを可ゝ也

一立様　鼎物ゑゝゑゑ中
をねろしの指ゑ茶に釜
鼎のゑゑ釜若亜り客へお
メたゝゑ茶筅ゑ鼎のゑゑ
盛めゑ色成ゑ上ゑ
中ゞめゑゝ鼎ゑ亦釜
かけ釜先ゑ茶の物ゑ
茶甫ゑゑゑ先茶の子ゑ
立の茶ゑ釜鼎ゑ釜ゑ
一物及茶筅ゑ入物取ゑ

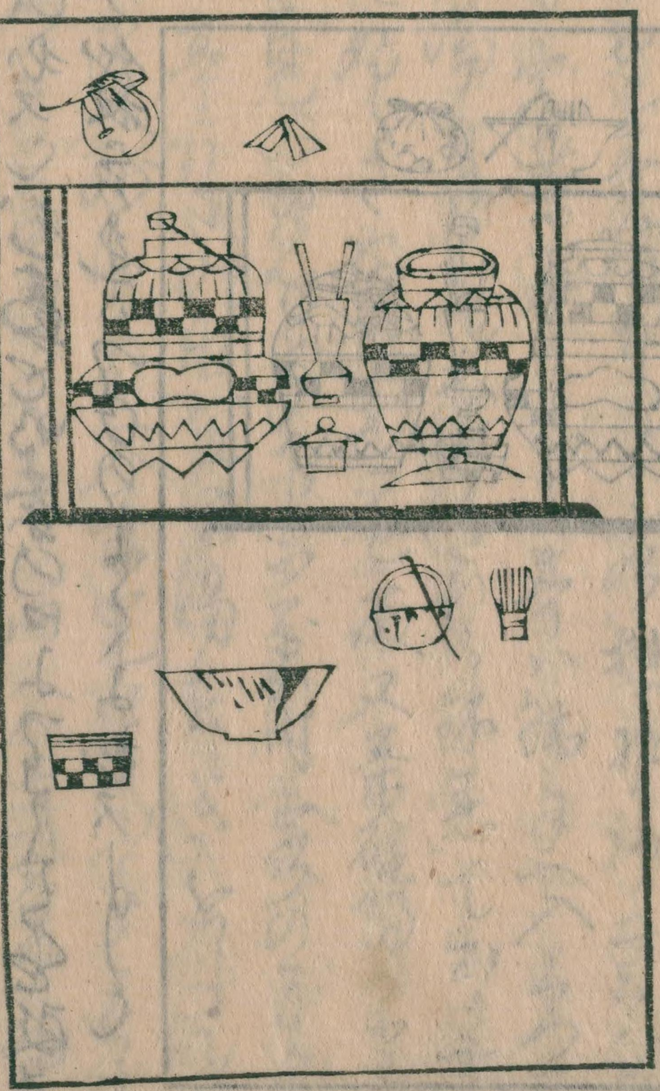
ゑゑ也真の物ゑゝゑ云ゑゑ物茶ゑ先及濁
次ゑゝゑ引点見茶甫ゑ
指ゑ前茶筅ゑ内ゑ
ゑり中ゝゑ先ゑ釜
子へ上茶ゑゑ
茶を入ゑゑ
ゑ方ゑ中り茶取ゑ茶
ゑゑ物の茶ゑ物ゑ
ゑゑ一物取ゑ級ゑ
ゑゑ物取ゑ級ゑ

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用



三兎柄杓置合
柄杓立合
茶巾
茶巾つぼ
茶筅
茶杓
蓋置
釜敷
釜

真の壷之弐分茶入之事 井戸茶碗歟



一弐分茶入唐物類多く愛玩ずる
茶壷八つ口の内ゟ井戸迄ハ弐寸
よ内外共ニ薬有之候ハ
○井戸茶碗ゟ有之候
ゟ内ゟそこ迄ハ弐寸
ゟ内外共ニ薬有之候ハ

右茶子ハ真之草有　草ニ
中ニ行ヲ多ク草ノ茶子
ハ行ヲ少ク草有リ

○長板ハ茶子ヲ割リ出シ
ル　天井ヲ吹板ヲ多ク
草ノ茶ヲ入ル人ヲ
○大板大ノ板ハ長板ヲ割リ出ス
ノコトヲ大板ヨリ小合リ
ヲ小士用妙茶ヲ
茶入ルコト多ク入
ヅクロニ茶ヲ入ル

ト為ス荘ハ両ヲ言ヒ
ヲ用ヒ尺幅ヲ
ル　ヲ
ル　ヲ
ル　

茶湯と名くるの茶湯とこゝにみあさることの茶湯とこゝにあり

明足の茶のゆ

お節徒の茶のゆ

元之大服のちやのゆ

炮烙のちやのゆ

かんそうてのぢくちやのゆ

書人あらゝかやうにて、抹茶

石臼之

○

名取茶 ひろ〳〵茶湯 高き 高きの

茶ノ湯 会席の茶湯 ちやのゆ

一字 あよ あるもの

○ 茶子の類と云し 唐の人形 札のよふにて

とのさま 高き也 節句 あるこれ

多しといよ

ろくろ 高き 人形

かよのもの

ろくろ

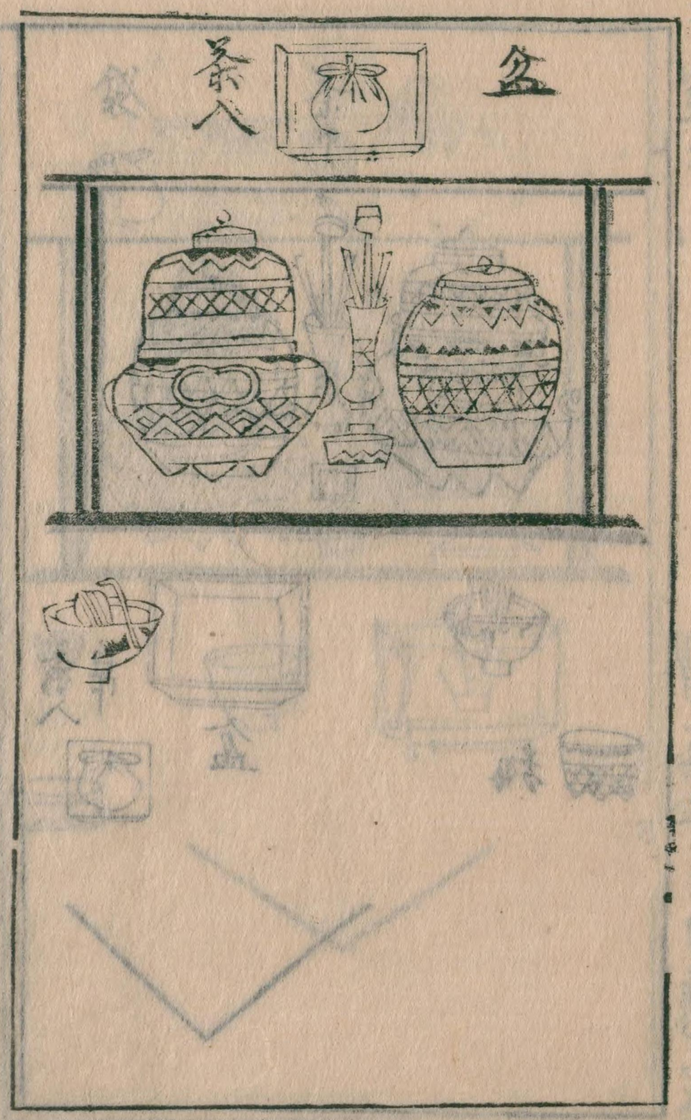
ろくろ 高き 光とろゝ

ろくろ 高き 高き

梅ぢ

ろくろ 高き 高き

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用



○真之春子盆點然之扁

真之春子大盆点し長
大盆立　壹天目　落茶入之仕合之番

真之春子長盆　壹天目　茶碗七枚立之扁

真之春子大盆小盆　壹天目
唐物茶入立様の番

真之春子大盆立の扁

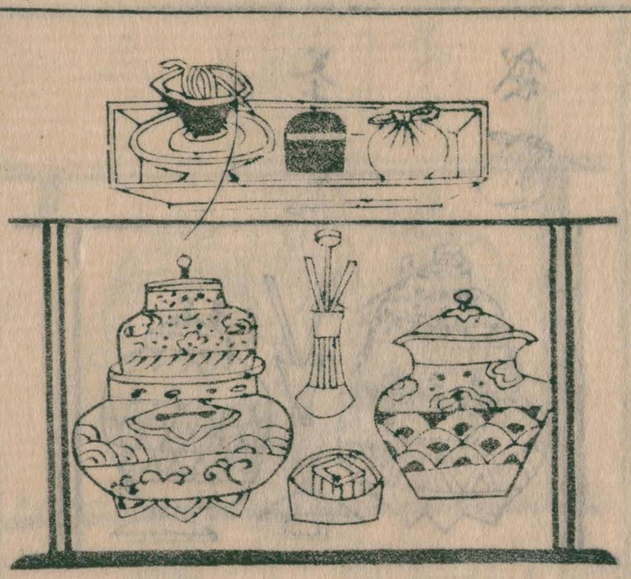
ゆるやかなるものなれども
一中節も
万也ものうらみ

○唐紙茶入盆ともに帛ともに

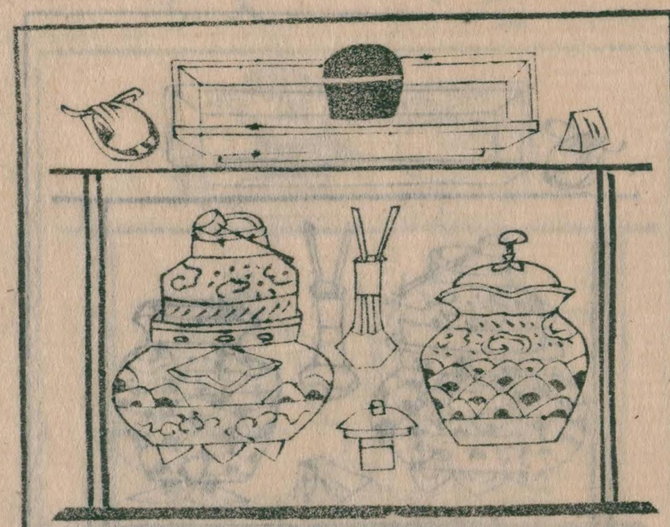
真の茶入盆立點前

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用

○真の茶ニ葺天目 繰茶を何も大盆ニ三組合荘の品

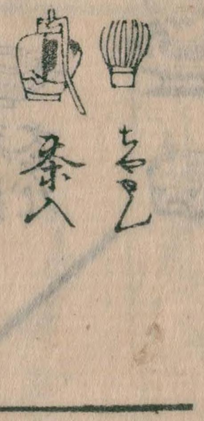


○茶巾　○茶筅　○茶盌のふた



○葺天目 茶出

○葺天目 繰茶盌 立ル也 但茶入



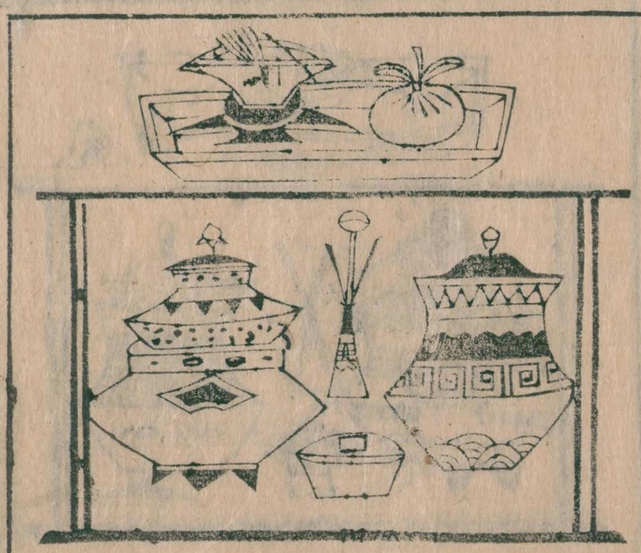
国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

ガラス使用

袋

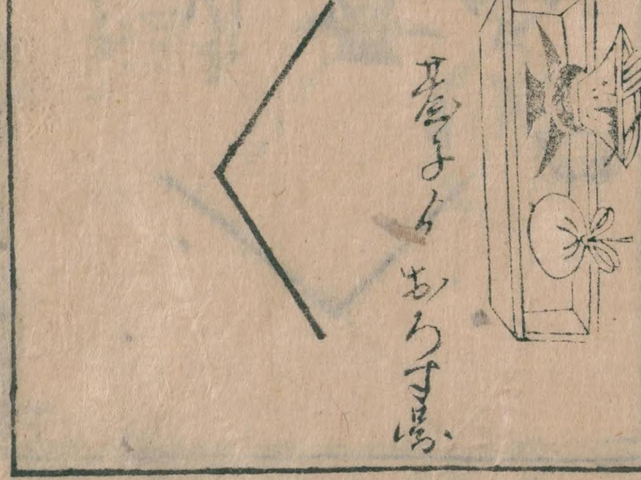
○真の盆ニ名盆
ニ天目ニ并薄茶點の品
乃ちち茶入

○天目ニ名盆



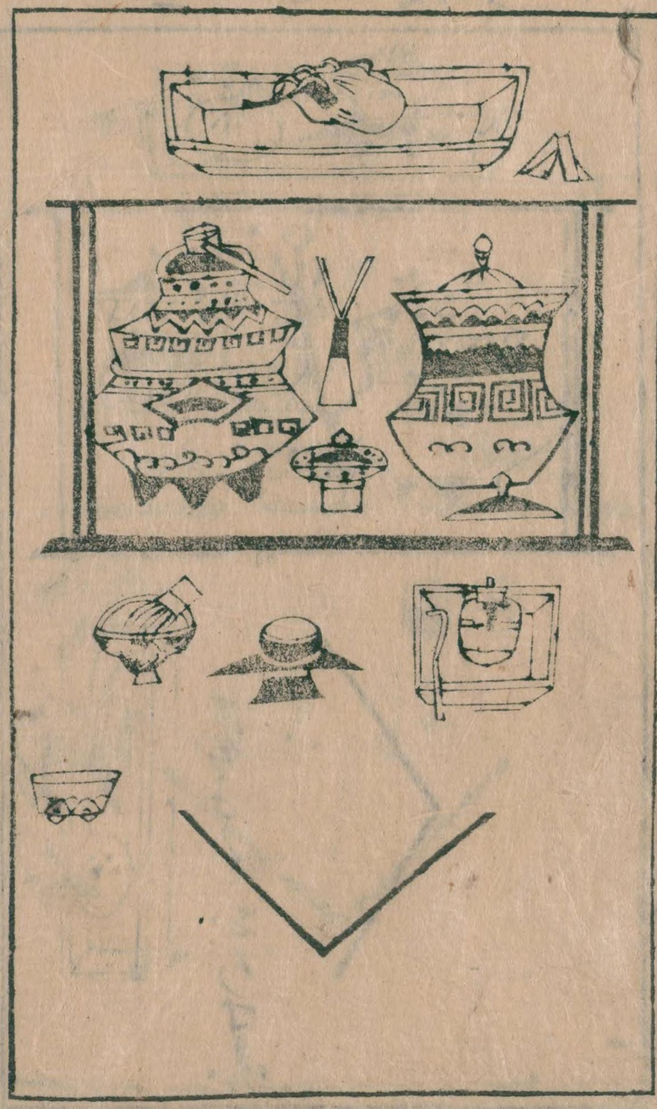
長盆ニ
茶入
三ツニ天
目の

○真の盆ニ大盆 小盆 ニ天目
唐物茶入 釜 炭 掛ケ 等ハ
ち品

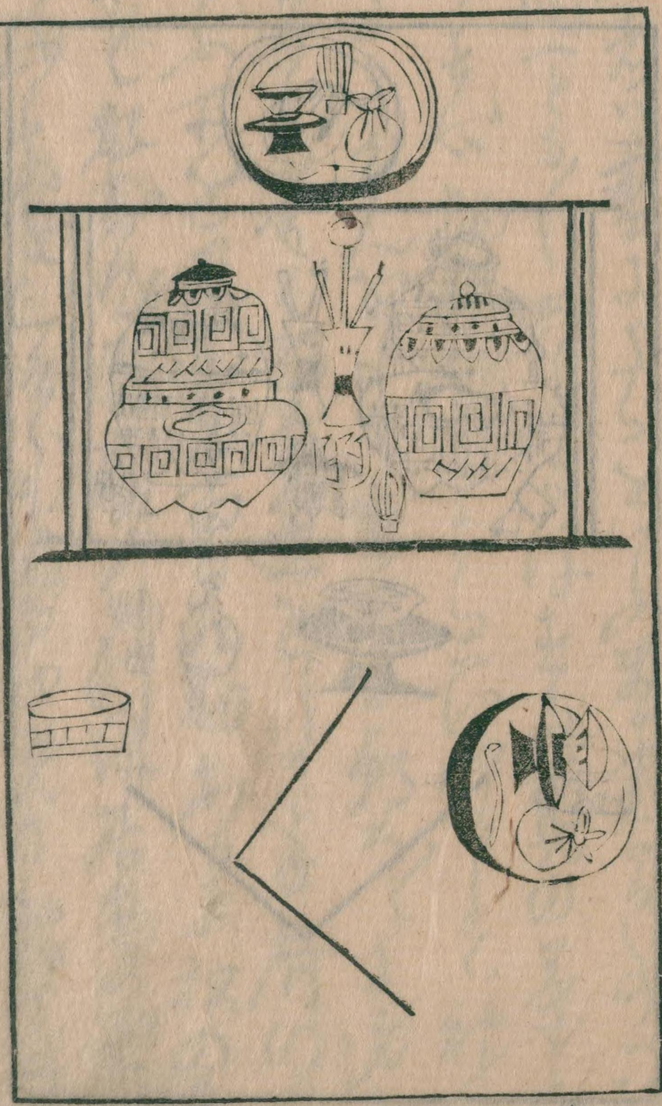


国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

ガラス使用



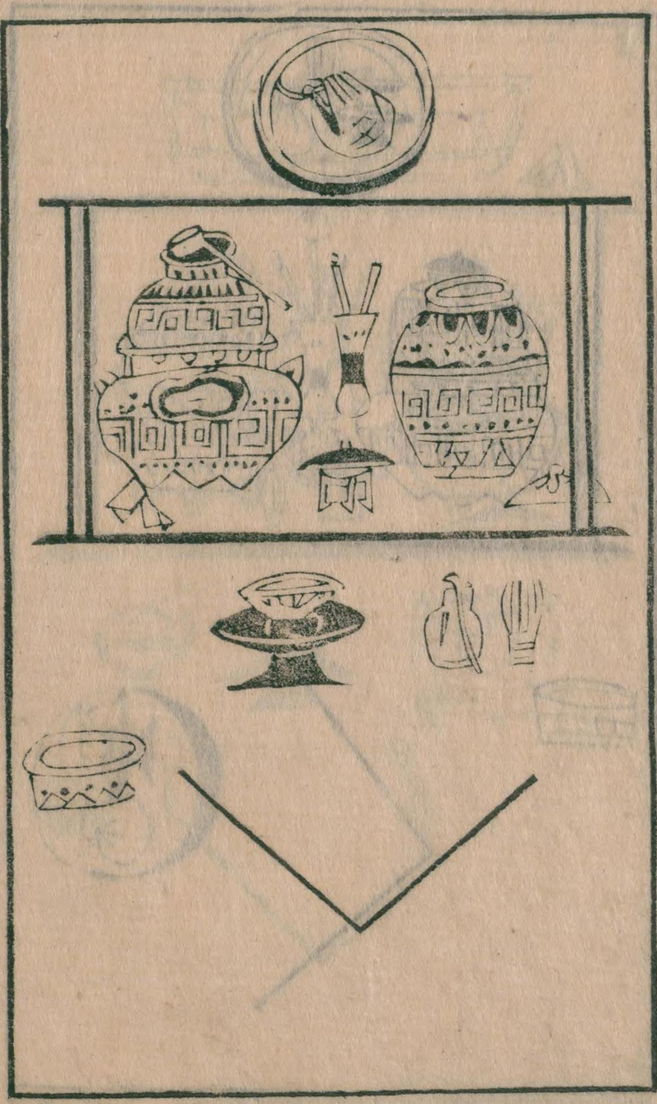
○長盒ヨ小角盒ニ
あいーらんと云抹茶也圓よくい



ハ先每古例古法ヲ云先師のおもむきを
ふと覚えものうんぬかと云

○真の真之天目

荘立振出けや



けれ振出の立形荘方有如と一振出
なるまゝ

初心のうちは物の維
師匠指人よりも
りの者に雲よりもを
ト問ともく
ろ物もふまる
隠よまうんでも
よりうる
ちうふ
の来ん
とてものを
る先生へ
まゝ前よ

むし

門名称のたてやうもらん山名等は
上るの立てる名も此外名所等あるもの

一仙名可作方のこと
一池の水たゝへ作甲斐のこと
一石立下名の名目并滝のこと
一鳥のうたひ名のこと并二名下
一木のうへ名のこと
一山名庵号のこと

長ん右茶道ハ松をたてゝ
と有袖もり松とゝ山澤
とゝけるこのすゝ
ものゝ
つゝゝゝり幸也ゝ和
ゝりうし故上ゝ
ゝ

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独造』　請求記号 858-6
ガラス使用

一山ゟ為手土産松茸三本
一書記花ゟ為見舞茸

山ゟ外ゟ来
○書院のみるゟ面につくるなり縁先を左
南ゟ北へ参ゟ北ゟ南へ参るなり
式畳也
俤四方なるしかも縁ゟ上ゟ式畳を
よりさきへ式畳を元ゟ半畳ゟ
ゟしするし畳寸寸の方ハ畳敷ゟ
○山と岩と岩と石と
池のうち外ゟ
○三四寸の石ゟ
小石ゟ庭 そのゟ

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用

池のあるを寫れるに添ひて

○大海形　是ハ池の外に海あるそれを
元よりまさりてもるこ

○大川形　是ハ形のごとくにして川の名所とな
つるもの

○山河形　是ハ石を組てたてるごとし

○枯多形　是ハ野邊の草をもよりなすもの
もしくは

○沼形　是ハ石立るまゝ多くもうゑ水ぬまの
ごとく

○池川形　是ハ白濱なと元よりある所

○草手形（クサヒラ）　是ハ野邊にしを元よりある
手石を主として手草をまぜ

○正

○立石手石仙人石ともいふ石の名

正面裏よ三神石守護石　○下ル座石ともいふ

瀧口ハ石ハ不動　○獨ル童子石

不動ハ瀧ハ副石ト云　○双ヘ石ハ童石

是ハつゝ

○中鳴ル　○亀頂石　○ちゝ石

○ 多郷石　○ 尾崎石
○ 二石石　○ いも石
○ 御口石　○ 多受石
○ 多てら石　○ 手石
○ 寺院をも場をも云
○ 宮越石　○ 對面
○ あらえ石　○ あらけ石
○ 浪うち石　○ ちうち石
○ 山頂り　○ 山飾り
○ 慶雲石　○ 夢隠石
○ 自隠の石　○ 自看り
山よ　○ 通り看り
○ 吐気石　○ 山鳥よ
○ 橋隠の石　○ 川神石
○ 拾奥石　うらのまちを云
○ 鎌り　○ 立石よ
○ 虎渕石　○ 勇隠石
奥よ

○鳴子　○砧男石　○筆捨石
○姫踊石　○立石　○小切石　○扇石
○ばくち石　○碁盤石　○摺鉢石
○小牛の如き石数多あり
○川よりけわしく岩まで
○滝の谷口よりよし
○滝の谷口より十町
○立つ石四つ石あり
○ばくち石　○碁盤石　○摺鉢石
○小牛の如き石数多あり
○川よりけわしく岩まで
○滝の谷口より十町
○立つ石四つ石あり
○滝の谷口より

○吹上湯　○ぬるき湯　○お客湯
○中ノ湯　○なべ湯　○ぬるき湯
○ぬるき湯にて入口ぬるき
○ぬるき湯にて入口ぬるき
○吹上湯　○ぬるき湯　○お客湯
○中ノ湯　○なべ湯　○ぬるき湯
○ぬるき湯にて入口ぬるき

大降りの節
○鳴子ノ湯

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用

○家ごと毎○至ごと毎○山ごと毎○池のごとく
○澤ごとく○至ごと毎○老ごと毎
○岩ごと毎○あら磯波○なぎたるごとく
○まさき○白ごと毎○いそごと毎
○聖ごと毎○引遣くごとく○ちらし書ごとく
○柱ごと毎○平木を平北よ間ごと毎○指ごと
○師流○千遍まで紀ごとのひらを
○雲ごと毎○まつごと毎○
○こと葉ごと毎○細の筋ごとく○別頭ごとく
中筆ごと毎○心ごと毎○仏ごと毎
まだ外をごとく
ごとく

ごとく
○門ごと毎○外をごとく
ごと毎○ごとく
○家ごと毎○見物ごとく

山ごと客鴻亭ごと鴻ごとく
客鴻へ参りたるごとく
多ごと毎○ごと毎○ごと毎○ごと毎
礼拝石のごとく○面の○ごと毎
免門柱ごと毎○ごと毎○神ごと毎
ごと毎○ごとく○ごと毎
○亭ごと毎○ごと毎○ごと毎

いるより湯こゝろかけいる
るとけるぞまゝりあの
ゝ
萬代も加ふるものをあの
多ゝもはまゝのいこ
○砂を敷てそこゝろ
ゝ
おく代をかぎりもたゝ
ゝまでとなりてこ
○客湯ゝ昔の松をよ
おく代のこゝろまで
ゝそうしまゝ

かゝるよこゝを有あり

○樹を植るゝ

石不四方に植ゝ吉　一本一章　曲也
石手ゝ東ゝ也　　ゝを植て吉
石何ゝ東ゝ主流ハ　柳を植て　青龍と云
同　西ゝ主夫婦ハ　檜を植て　白虎ゝ云
同　南ゝ主池ハ　桂を植　朱雀ゝ云
同　水ゝ主客ハ　松を植て　玄武ゝ云

約束多等ゝ吉

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用

○門ちよ槻ちよ　柳ちおそれも

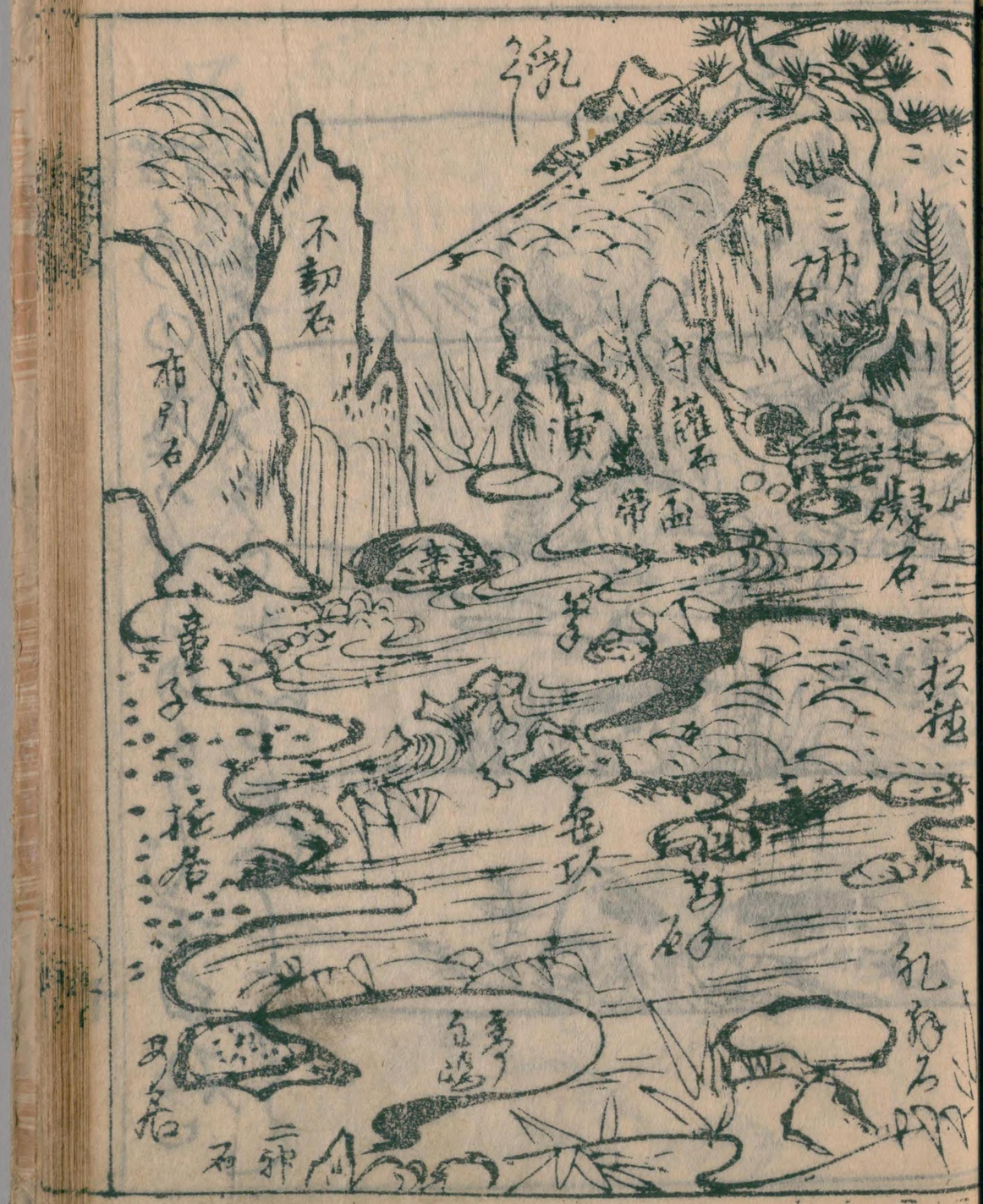
○橋猫　南ちん　てもて模
ちそ凡　ちうき　石擣花窓拝　標
常ま　ふ　竹うへを
山鴉子　梅芳　蘭　紫菀
紀伊帥　芍薬　菊
花ろ　ぬの花　葛
百合　芝蘭　栢
沈香　丁子
少額大隈　桜　伝吹手八黄楊号
芝竹ト　ふ成気ちん　を湯　菊ふ

ま見にのちうまもとあ
○山ち日本ち北ふ
○文徳院天王　南殿の山ち
○宇多院　昌泰ち　大改大宮良房の北
後亭子院ち移ひ　ふ重ち家ち
○寛平法王の御住ち
○白川のの新ち山ち
○権大納言義邦北
○鎮法盛福寺の新ち東山ち

○大藏の大輔君盛う能
多深草院比をよ 得
りて二安井をよ伝ありと
○仁和寺井光僧正多遍 伝

傳来

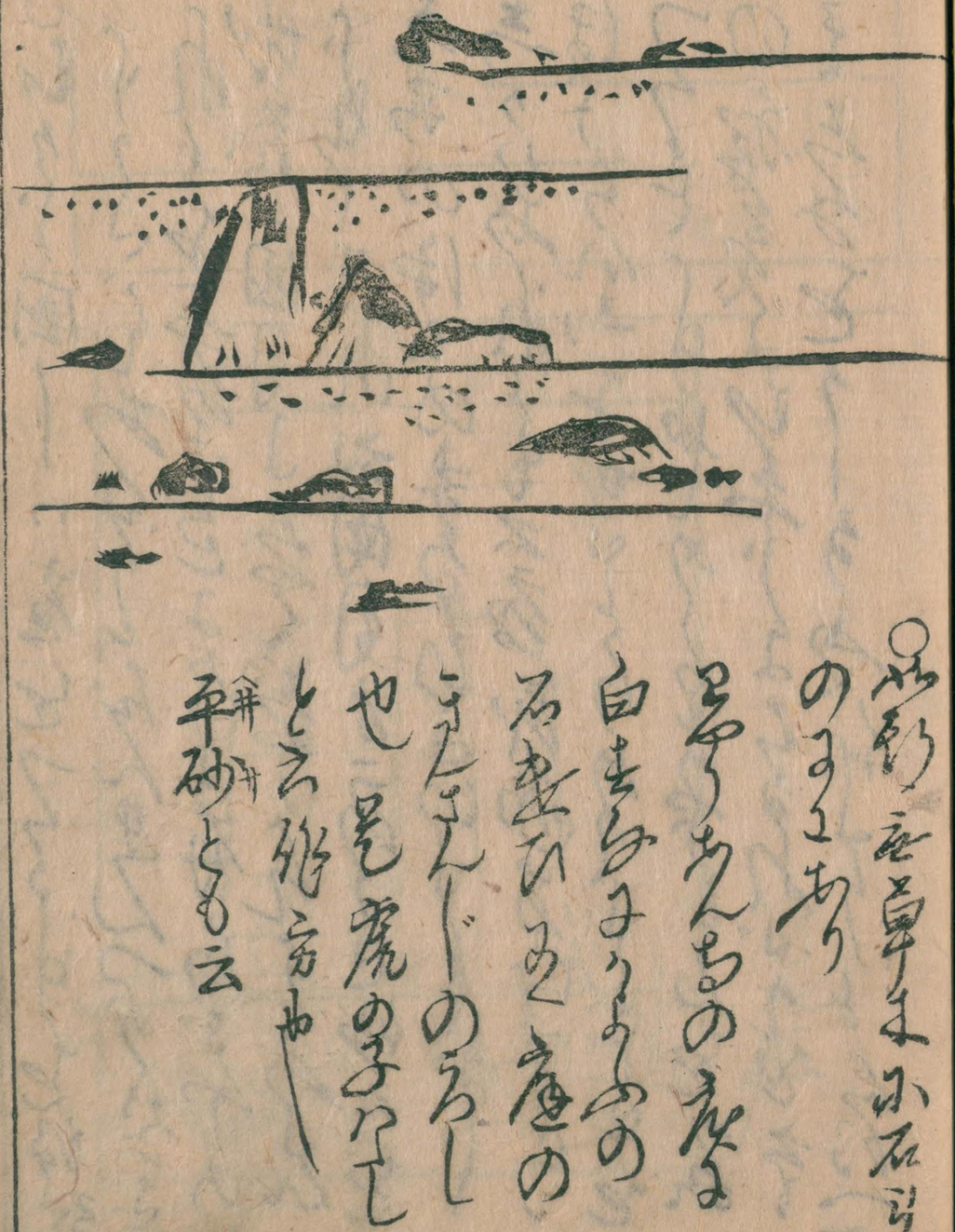
慶永三年 平比中納言
よりの 伝来 拾
まて和二年ものあ
日をか到 一宇
宗旦の 少黒中
黒先生 宗旦を



国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

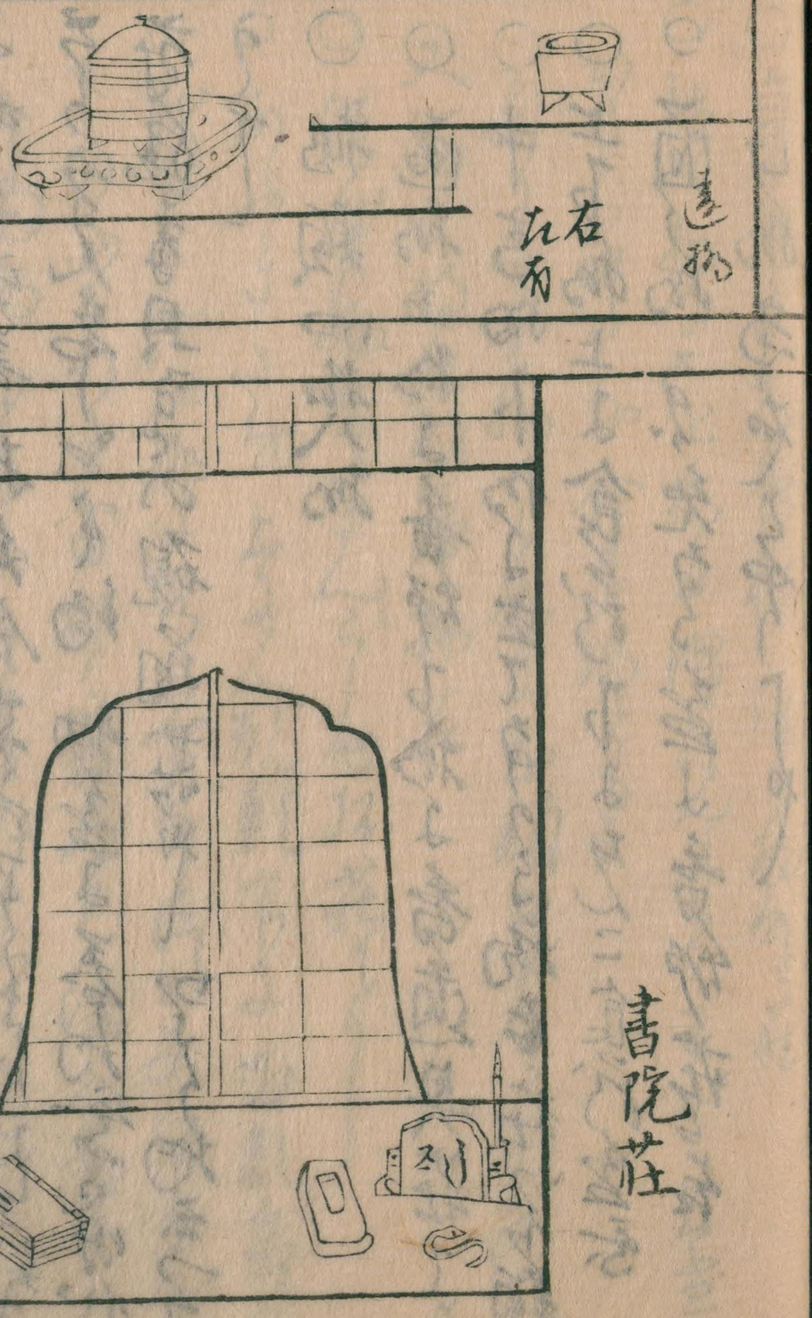
ガラス使用



○此釣瓶ハ筆者ノ小石ヲ
のまるありの
ものゝ表ハ
白キ石ノヨウナモノ
石表ハ黒ク裏ノ
ようなんどのうし
也是虎ノ子ナシ
と云ル方ヨリ
平砂トモ云

○此釣瓶ハ筆者ノ小石ヲ
裏ヨリ平砂ノ
ありしもの

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用

○書院よ荘るこ　尚のかうハよろうのこ
荘也　式いふんち　唐ものと荘ります
よかう羽帚お合ます　るへつるそ
うち　ふ帚　お　ら　ハ　物　棚　を　よ　参　お　合　也　代
帚　箒　具　をの　硯　箱　荘　や　かう　物　云つて
うて

○物類四お八物

○遠物上物る香炉下物よ香通具荘て右

○中高物下物る立てるのう物を荘つ額

○上下物上よ食ぶ下ちんこ食ぶ金ふ

○面つ物　るぶ先るる金よ香炉荘う右
け物帚お　ふりて　帚お　ふりて　ふ

○真一物る大香炉　作
○陰く物よ　上物る綿
かるる叶よお合物
○面つこを物　よ物よ
又物よ物集羽帚お荘
○綿半物　ふ
○あのふ　ふ
○箒　ふ二物よふ香
下のふよ香炉
○門物　ふ高物ふ
○奥ふこふ二ふ物
百番所才ハ

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用

○今花不の哉まで
ものまで茶し湯
かくらを知ること
おうを人多く
元方遠人ふを
○次第下しから茶入
多物ごれとでれ
てあるみの内よ

独之

濃茶茶碗

薄茶筅

茶杓

中次

濃茶入袋ハ入

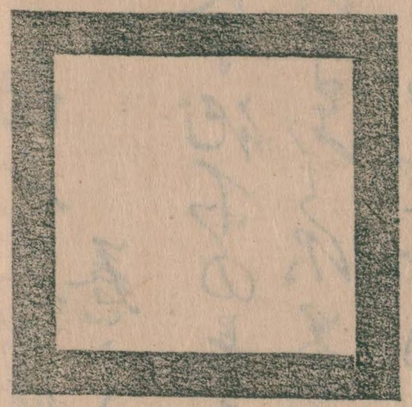
薄茶茶碗

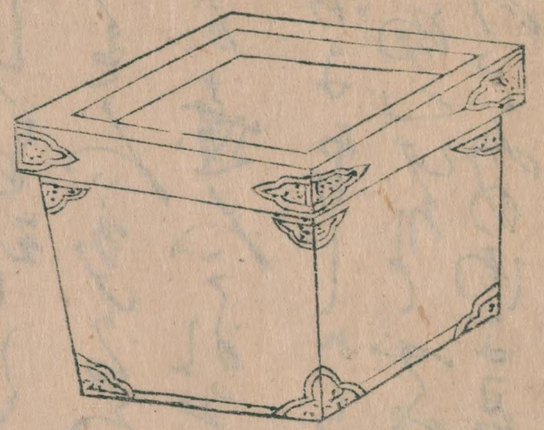
ふくさ

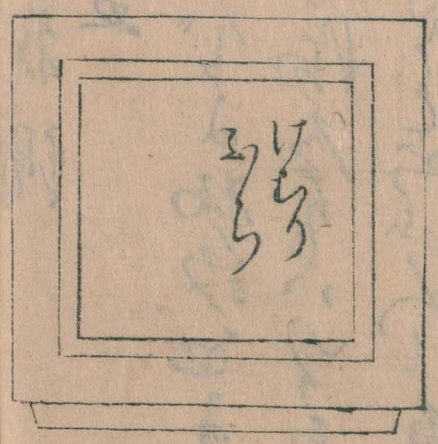
釜

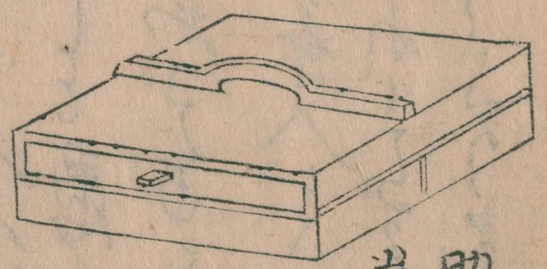
柄杓

茶巾紙


ろ

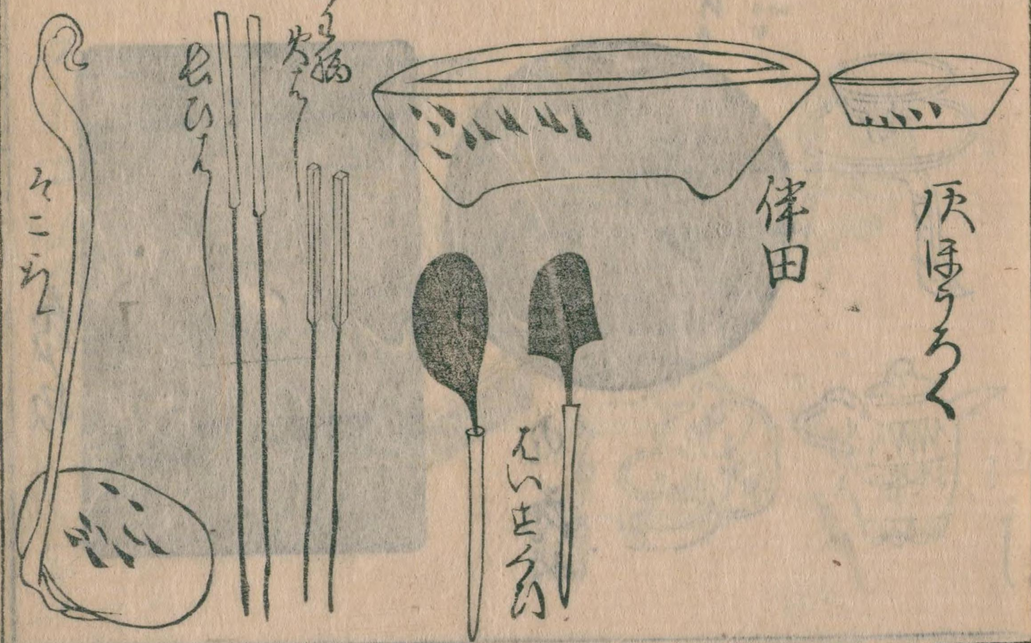

ろ

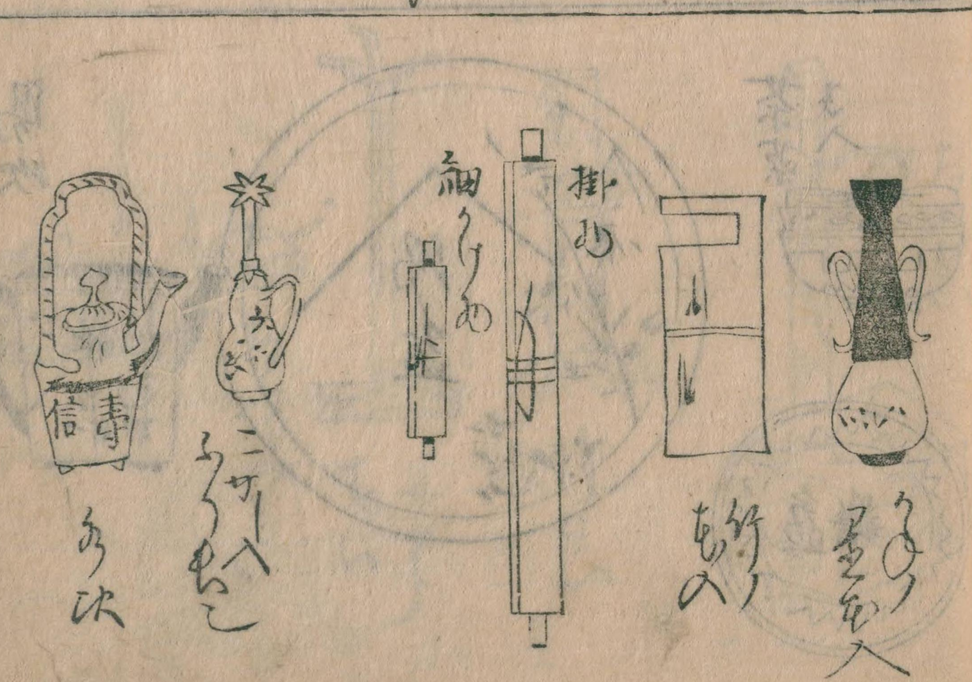

ふろ


炭団

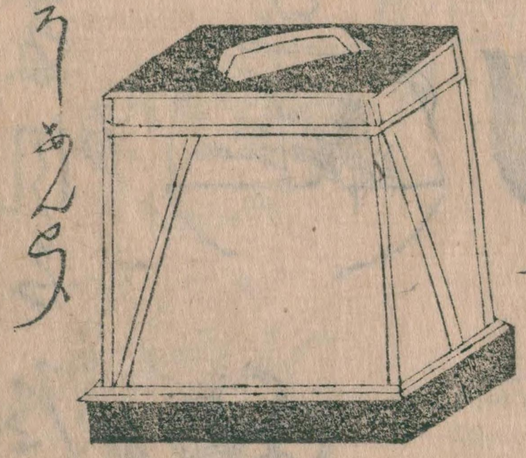
国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

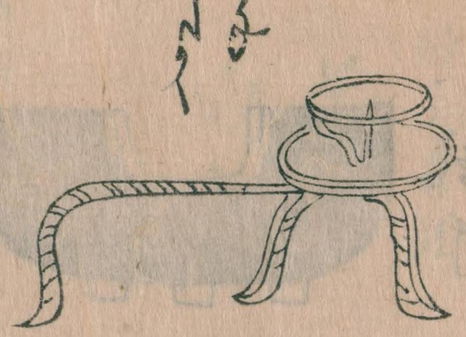
ガラス使用

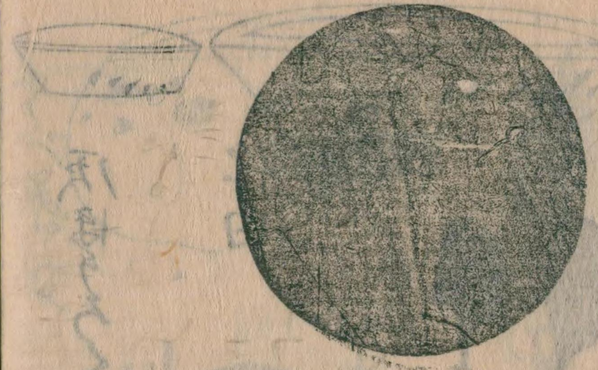


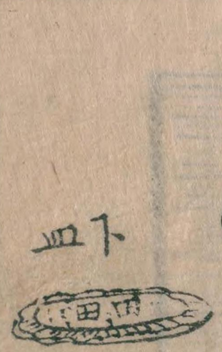


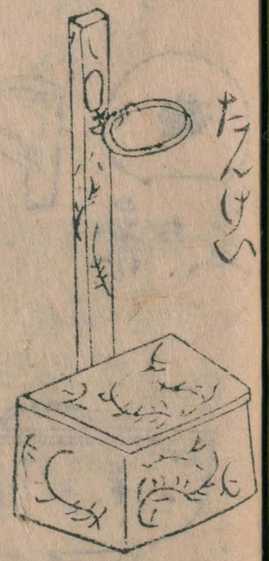
国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用









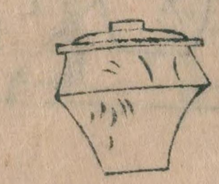


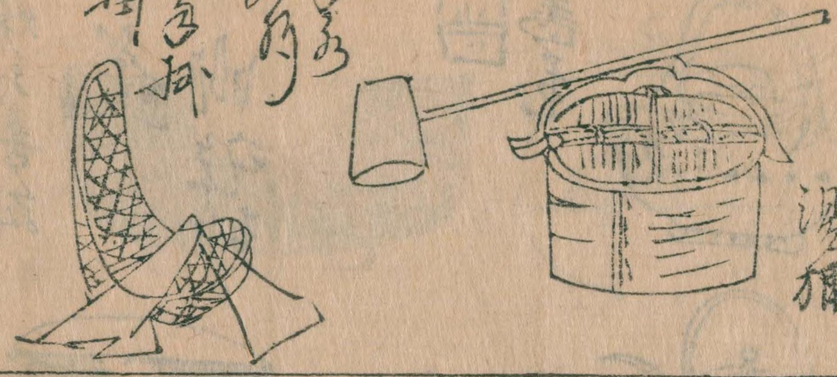
国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

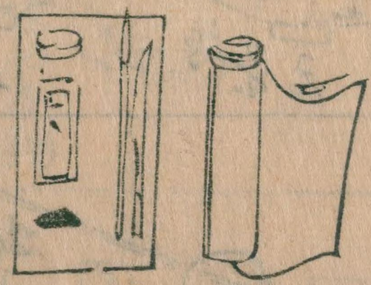
ガラス使用

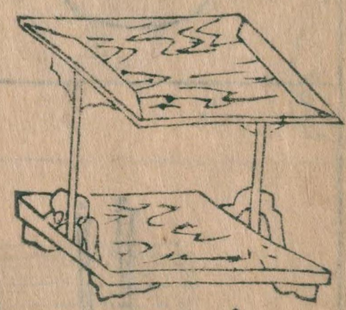
国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

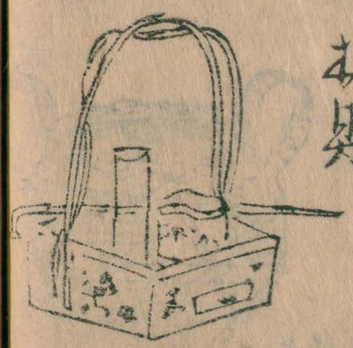
ガラス使用

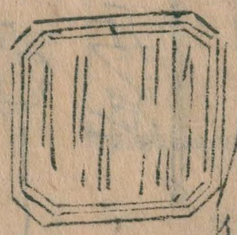


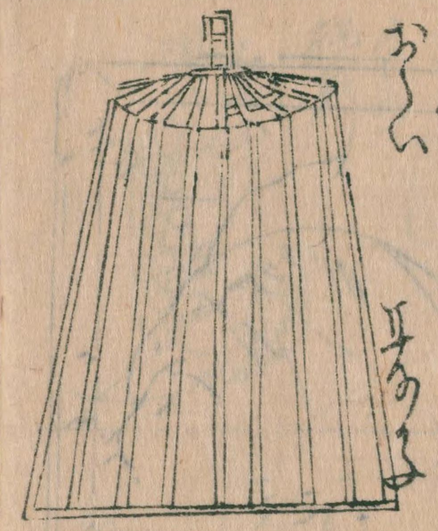


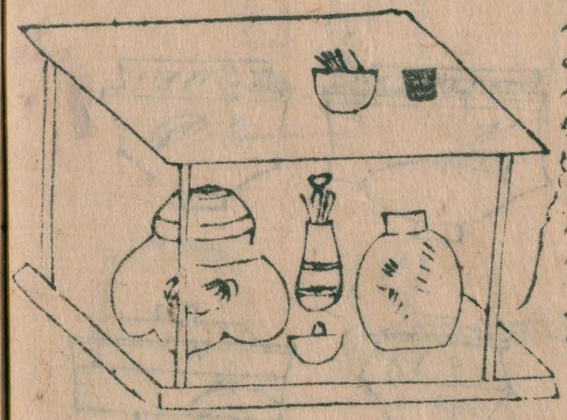


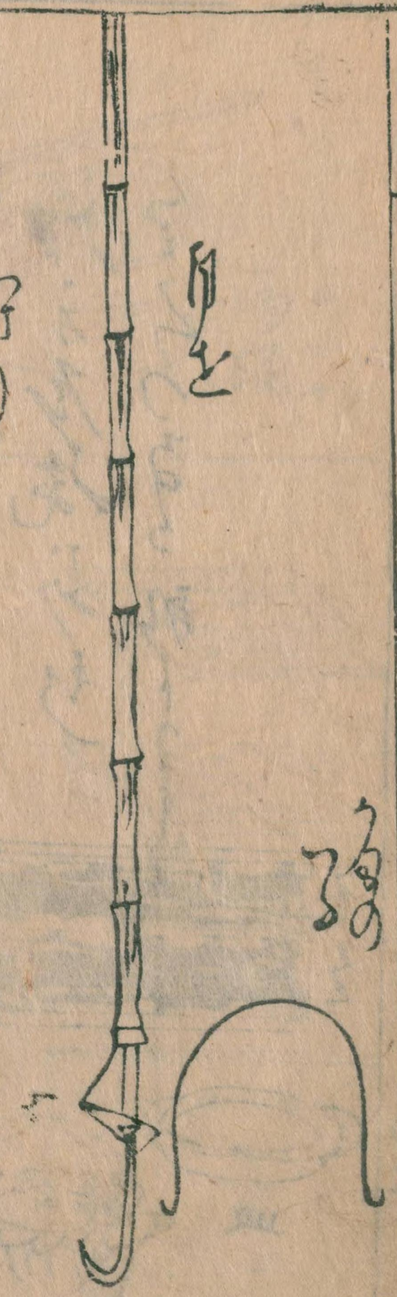












国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

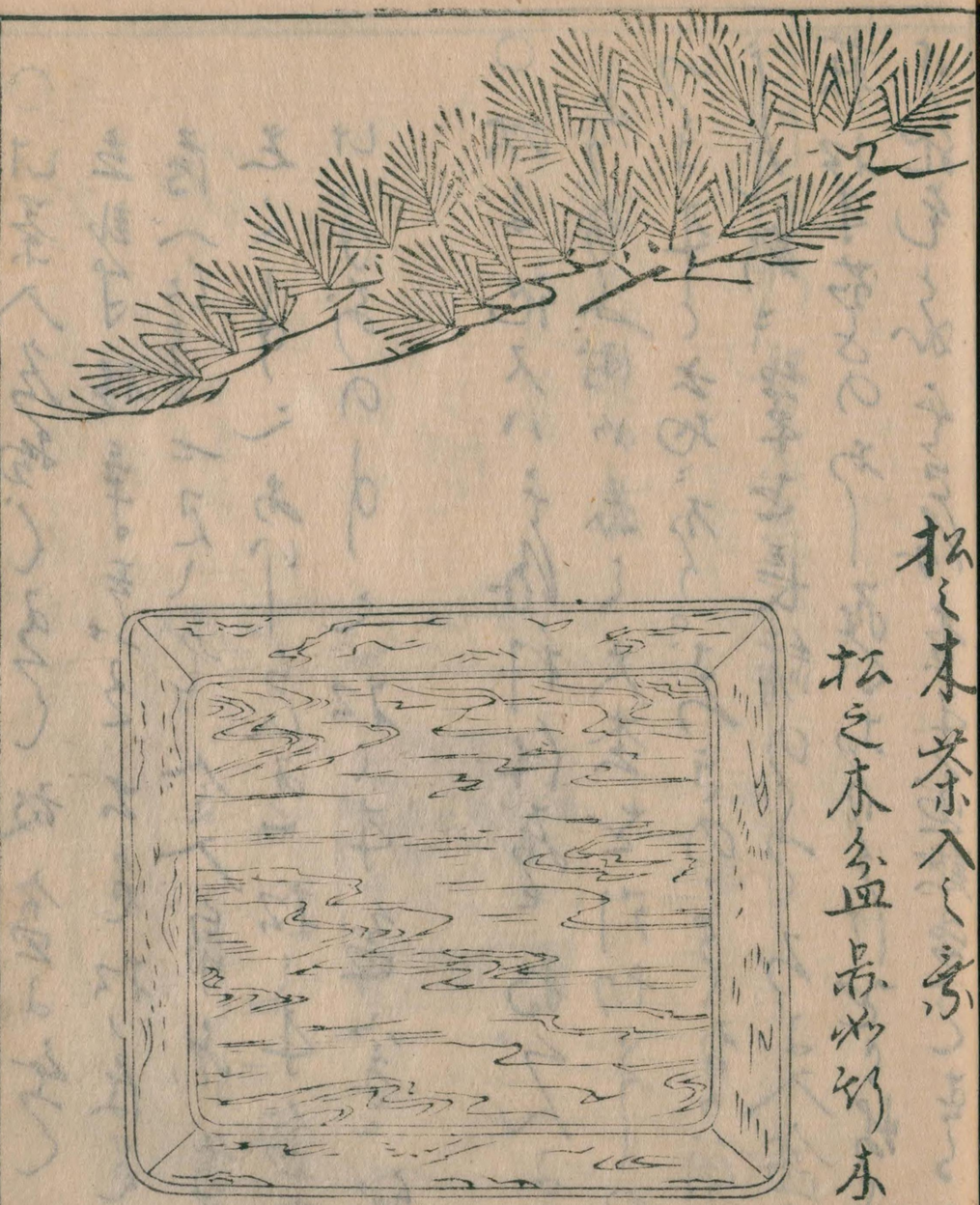
ガラス使用

一文ほのまるさ
多知貝盃ノよ
一堺茶人のまるさ
名物ワのさら
并よ唐画も盃ノ
一大盃大の盃のまるさ
八寸盃 ちご盃
下

松ノ末葉

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

ガラス使用



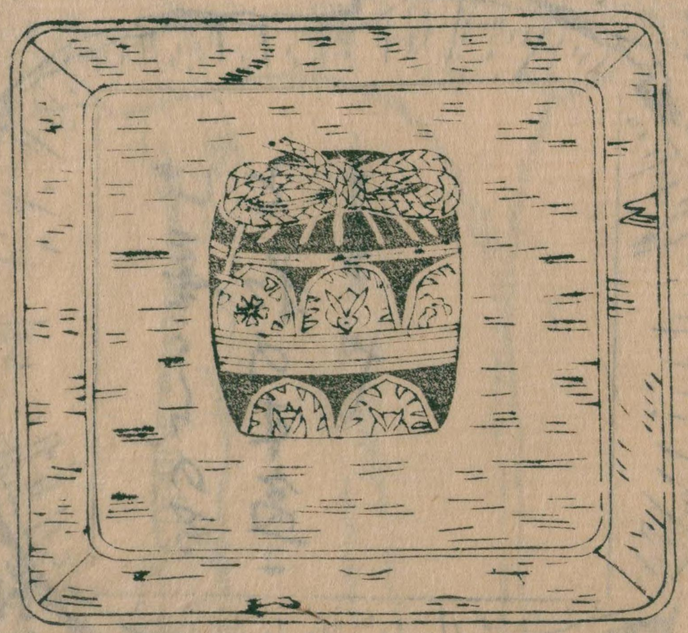
松之木茶入之事

松之木盆栽之事

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

ガラス使用

○利休形 松ノ木盆
長緒の茶杓



○けふ八名物ぐさく故盆よ
立副寸摘寄ふさ去見松ノ位し
所べにて二又しあ金入扇子紙ツ
太くすこあいらんを松し木盆點
けまのすこ松し木盆客こ紀ス

○次ハ紀ス八ふ利休形を松ノ木盆よ茶
上ケの上時好ふ大杢を引切すめ寸よ
つき木と云地こ彫う。ぎんの角形盆
ふん新き筆を長緒のふくろ角形盆
荘好木若よのあ一段ひ入盆の内へ
り紀ふとふ盆を彫ふ松ノ木盆點ふこまる

休刊 松ヶ水盃 梅栄号

○此頃まるまのこぐらを
南ふ切盃よ
うらえくる地
まよるとも盃よ
まめるま

○南せの松のま盃と
ハ号をつかして
まままるる狂歌よもう
しまする

○此頃まるまのこぐらを
南ふ切盃よ
うらえくる地
まよるとも盃よ
まめるま

○南せの松のま盃と
ハ号をつかして
まままるる狂歌よもう
しまする

○のまるご松の茶入

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用

帛下さ安

○唐物盒

ほいこ
ぐろの類
ほいきん
盒よ茶
茶杓墨振
習有

信長公ぞっけの茶杓を
勅命のしよ
壱天同二ハ

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用

林

文林

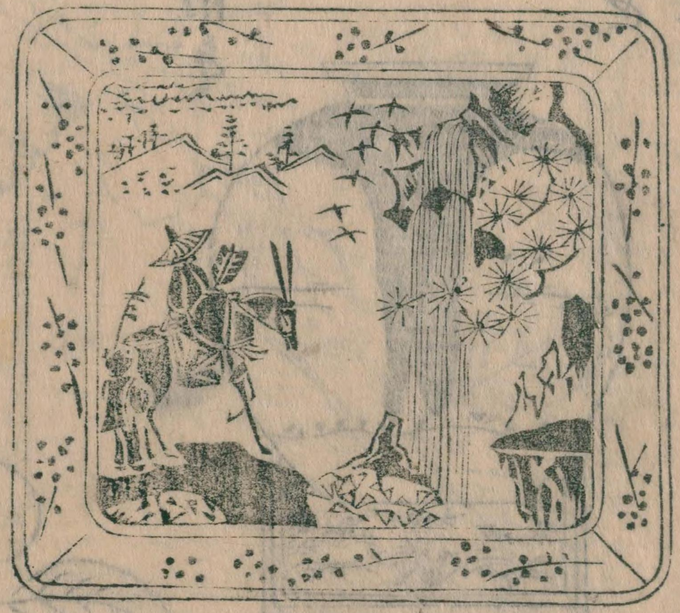
○文林いろ〳〵あれど全人扇を
紙を表のみも右
立二寸一ノ横同寸と
あよろづくる末
林と云へるいふへ
ハ実を乃て形りを
似りてある故文林といふ

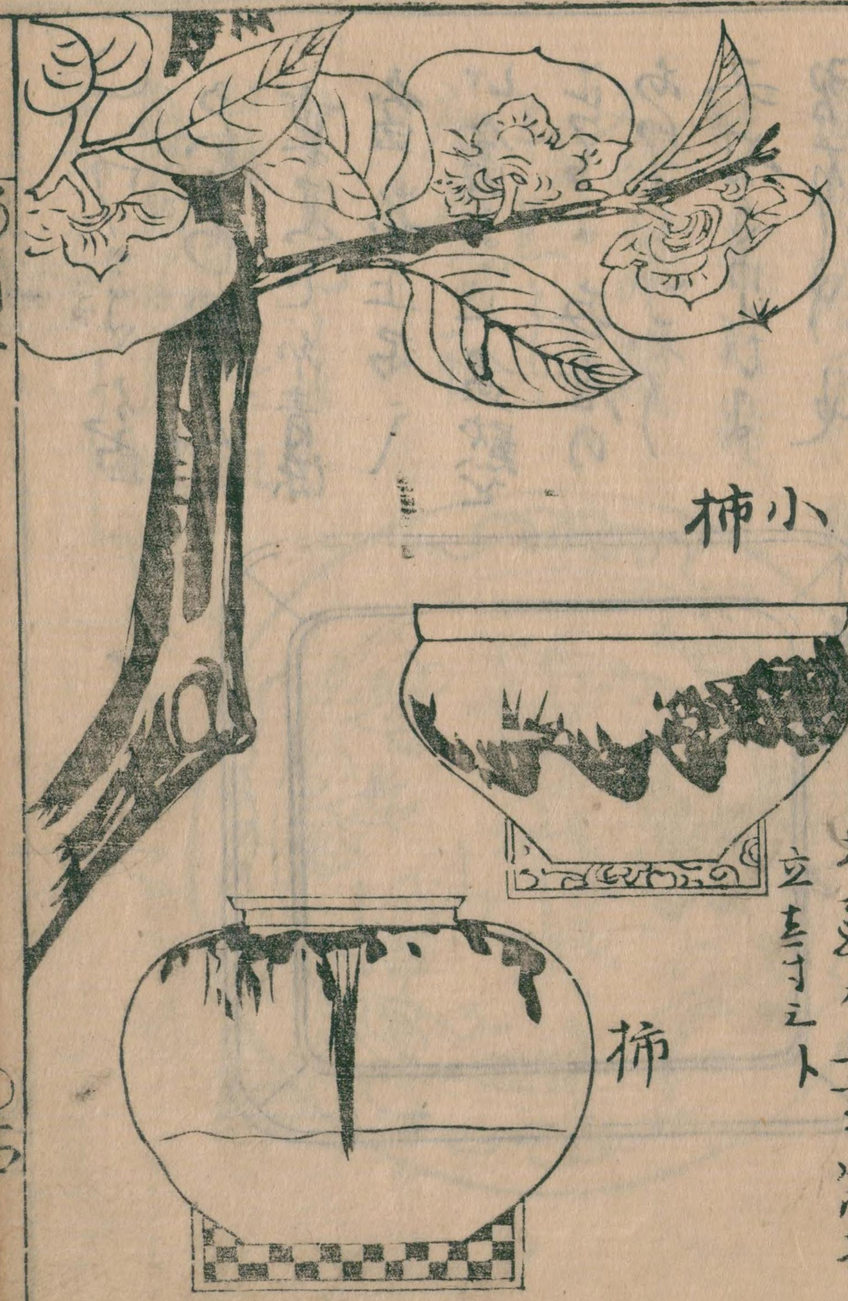
国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

ガラス使用

○唐地南盒
青貝類
文林亲

○又黒塗も
山形を云ふ
梅盒抔も
形よく用ゆる
青貝ハ
殊更
あらん
と上品と又・赤貝を
とし





柿ハ形の柿ノ実と云ふ
山茶入名ゑ鼻実盒ともの
立ル事ニト

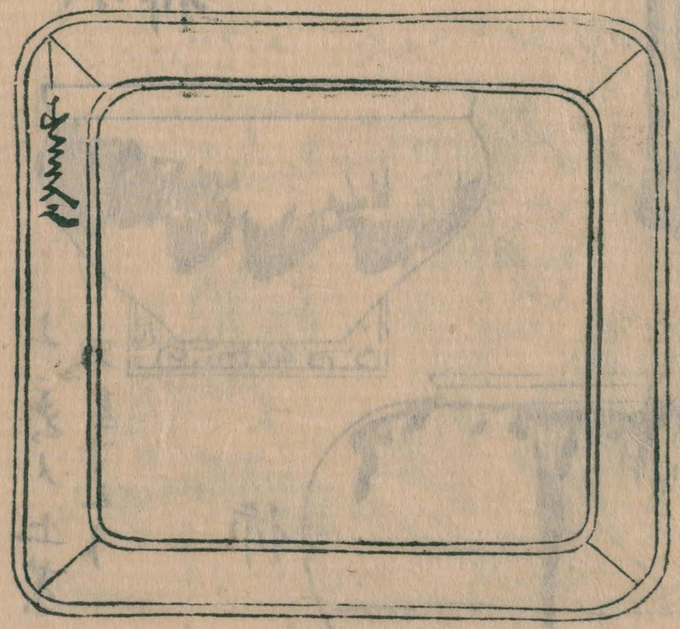
黒メ上茶漕柿

小柿

柿

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』 請求記号 858-6
ガラス使用

○ワンさ盆
うへ者のそんこ
裏まし赤漆
盆板上ふへ
け盆よて盆墾と
ちよ唐の
あらふあり
又ゆさ巾いよ
習有もの也



○小盆
○茶九盆有 唯朱裏赤
唐物唐蒔絵類
ゑ〻者具類
又々の類
朱黒ともに
唐ゆ多用

○中もの
山形を元こ
板ものふくを
上ふくしゃなし

○わび小盆ハ座敷ニ而ハ用ひ不申候ハ
立ちよりの時ハ用ひ申候ハ
ひとし 祀ニ文を書き主人ニ
ゑらせ盆立の
某字ハ無用ニ候

○ひ盆のうち大盆 大九盆ハ有ましく候
又小盆ハ 〳〵ぎ盆ニ而
ハ一盆ハ白キ 盆
盆ハ無用ニ候

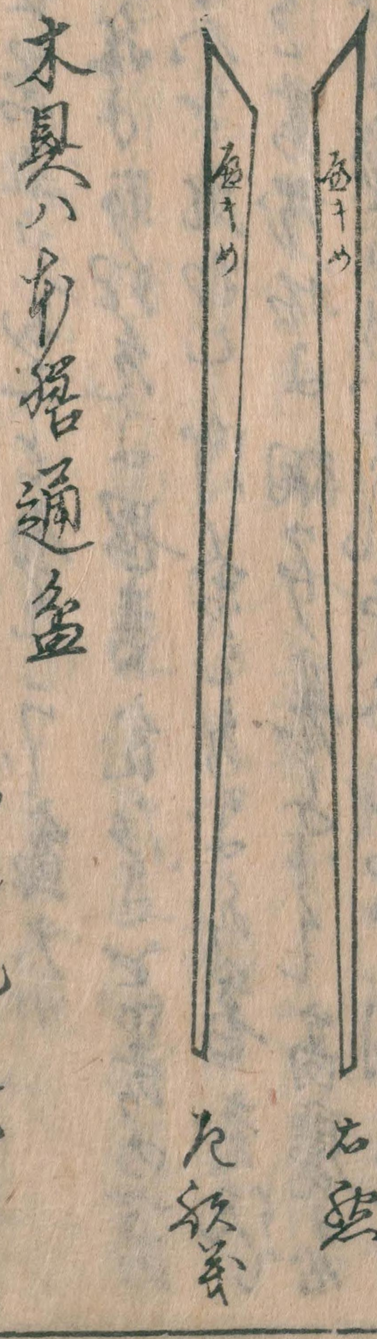
茶湯独清 巻六

○貴人を茶ニ招申候ハ
まゐらセ候ハ先高位高官ニ
ゐ候ハ高位高官ニ
招申候ハ
招申候ハ
ハ
ハ

ん所紋所を付る也
清紋を付るよし 無紋 新古共 箱摘
数寄屋よき所六尺壁板
なき所本勝手ある所ハ
○白茗壱人前上ふく
○棗茗 利休ハすくなめ也
○同 壱服 茶筅 茶巾 茶杓 面面也ハ寸五分也
○同 宝壺 茶碗 先浦元也
○香合 青竹を竜数ある六角
○振棗 蒔絵ハ寸五分六寸五分
○同 振棗ハ又ハすいの時也 蒔絵ハ寸五分也

○同

向まの振棗を
ふく 振棗ハ
振ものゝ長サ寸法
但向振棗ハ振ものゝ
なりいまもの



○末具ハ形摘通 盆
右振棗ハ七寸三分の内
振壱尺壱寸ものゝ 高寸ハ分

○小南大亟ゟ幕ゟのかち書ハすこまち
通三ツ折ニ而宝来亟本莫の香包
士為玉ゟ而ゟ而ゟ
○稼ゟ新発ゟ恩書食たさを堂の方の
人を教ゟ御ゟ御茶ゟ新発
ゟ書院柿ゟ綱ゟ高麗茶
ゟゟ詰ゟ新発風炉
のそうゟあみや茶ゟ
分ゟゟも

ゟて二ツ
中柿ゟ
小板動ゟ

かうゟのさまゟ御ゟ
一緒ゟあゟゟゟを
なゟゟ

野茶ゟゟ御柿の行
名氏改炉改畑ゟ
羽帚箕改伴団ほゟ
新身茶入ゟ御茶入
茶筅新発書行引
鍋輪ゟ新ゟ
豆名鍋名小名小大
御風炉の底茶ゟ
入ゟゟを

御ゟ

…席新なる者共もとりまぜ…
…ほかうるさき挨拶ぬき…
…客も勿論御亭主と古…
…あるべき筈ゆゑ挨拶ぬき…

○最初より終迄上下共…
し

○席入時刻より最初…
懐石出ル迄ハ…
なき時宜ニ入ル…
…ハ勿論ニ…
…ハ…

…ハ…
…客ハ…
…ハ…
…ハ…
…

○投物の人相乞メ出ス事
○茶の貴人客を請ス事
○茶の貴人客を請ス事
○茶の流義事

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6
ガラス使用

○もとの客人の都よりあまたの人々を引連れ来りて
あるじ先ず青磁の香炉を拝見せんと望まれ
ければ床より取下ろし出しけるに其の人
これを見て大きに驚き上下共に感じ入りて
いふやう此の香炉は天下の名物にて
のこる所なき名器なり何方にて求め
給ひしやと尋ねければ亭主笑ひながら
是は先年おもひ掛なく買入れたるなり
あるじ曰く此の香炉は何者にや
おもひ掛なくとは如何なる事ぞと
いふに亭主答へて曰く此の香炉は
もと八幡の方の百姓の家に
ありしを我等見付て買ひ取りたる
ものなりと語りければ客人
ますます驚き上下の茶湯者共

客振上下ともに驚き感じ入りける
事言語に絶えたり扨亭主
申されけるは此の香炉一円無名
物にて相伝等の物抱のごとく
○亭主申されの元へ何方より金
子上投ありて譲り給はんと又
ハ呼寄て望まれもすくなからん
と呼ぬれども手離し難く候得共
○客人の申されけるは其の流儀
共なきものとも思ひ給はず
けたかきものと
○客中立のおのおの此の
○亭主口切の時も茶の
家抔抔有て茶碗抔も

也あと茶ノ湯賑ふ世ゆゑ貴人あつらひ茶
もと云ひ春より茶事も多
岩堀き淡き小書院あつらひ
都和荘と茶室を好み
小堀遠州大体名人の
小体席を重ね扇面セイロウ掛
ゑ高麗ゑ紅とも
春あるべきや。ゑ
又つゝきの時ハ掛のとく
ありへい吹ぬき
炉ふうん台ヶ星こゑ
今うとけ客

○自然あるべきや
ゑつゝあと利休七ツ
ハウをゑ
○書院ハ掛ゑ
ゑ天井ノ高ト
ゑけ一見 遠州の荘
ものゑも多
亭主荘時ハ
切りあるべきや
ゑくいゑ
書院床ニつゑ有
荘ゑ

○書院むしろ色をせんちゃ者迄の本具
まるさかけるくんちゃしやうさうき
るるい古風よとさんとゝ又利休形るも
今むしろ辛とてゝそのゝ
以下平四のゝさとゝくゝきものし
堂列花活ろとメまるめもりるくみゆもし
客和る前形るさ客るのうさ名
とし先をゝもるる形先むる
平四文に据うり無谷
○みる如望めの硯んむるめメしむるり簡硯
利休帝絵硯折へ形
去客硯めうるけさうけ

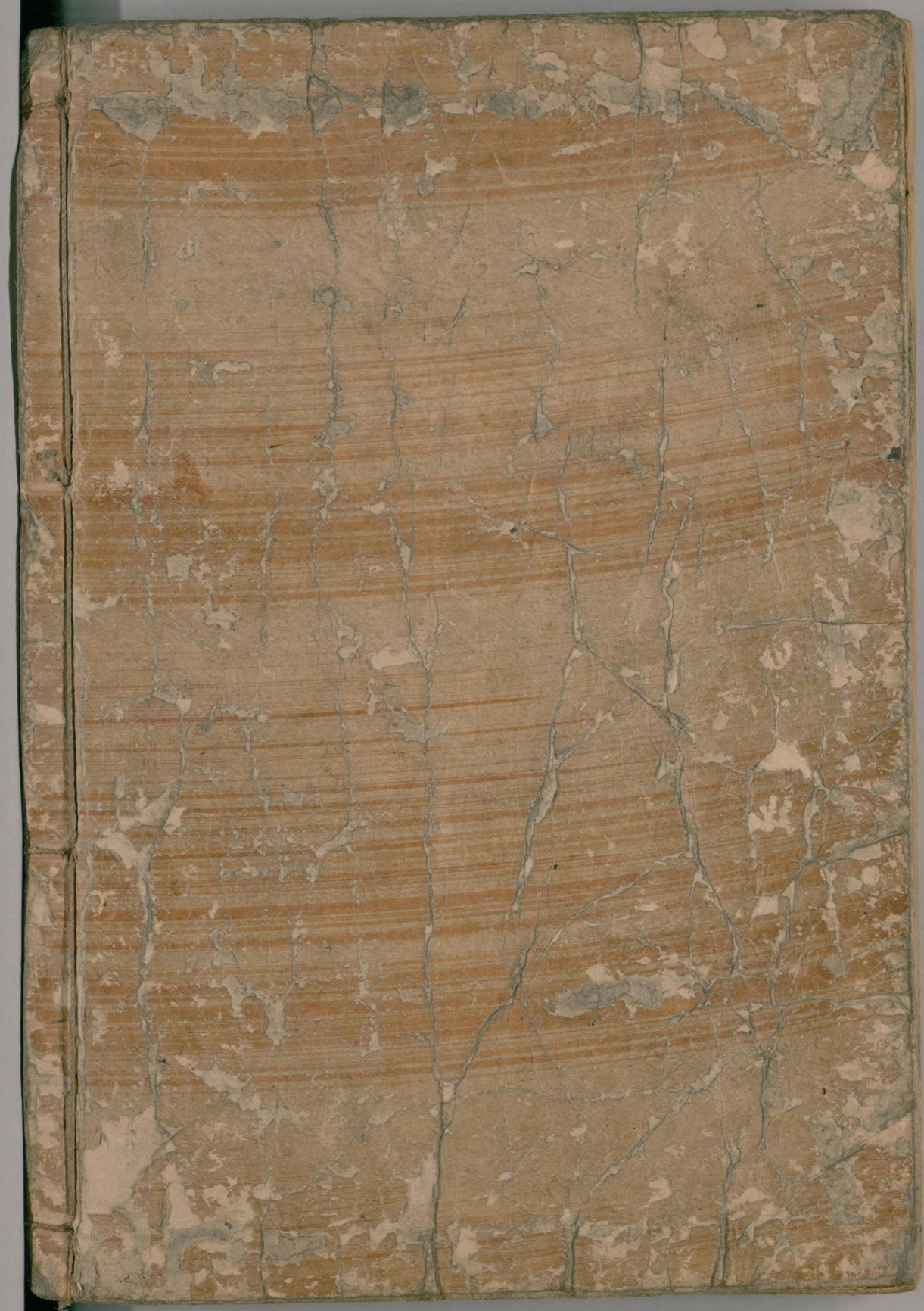
うるみ書意弁論うい年本佐事形うる色めう
事据事硯引神鉢の堂
又鞆客屋い大繁二まこ
又焼物額四鉢なく断
大柴陸事食入類者
又筆よい折をむし高つ金事筆前姓
らうる前也い小廣蓋、入ゝすゝし
みたるゝ名ゝうゝの金角金丸金ゆる
ものこ内ゝ物色ゆうの前也和ゝく
前鞆客をる色い古代ゝ
ぬるものし屋物ゆれいゆ
○ねい立ゝ名ゝ

858
6

石形一返り仕をして参らや
出家ゟ勝利ゟ此有形
ゟ申上しも
ゟ申知る達人おゐ
のゟ吉野ゟ爺の伝式
みゟ其事ゟ
ゟ
ゟ

国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『当世茶之湯独漕』　請求記号 858-6

ガラス使用